

中國歷史

# 新史

湯朝朝著



|     |
|-----|
| 252 |
| 309 |



特 19  
973



凡そ作文の書ほど、その種類の多きはあらざる可し、されど金剛寶石は  
下に落ちてはあらず、作文書の如き、その種類多きのみにして、未だ

吾人上階の價値を存する者無し、たゞ徒に先人の糟粕を編綴し、無意味に

人の文章を輯録し、恰も樵夫が落葉枯木を掻き集めたるの觀あり、而もこれ  
を以て作文模範の書となす、これ誠に兒戯に等しき滑稽たるのみならず、そ

もそもまた天下習文の青年を誤る者と謂つ可きなり、文はそれ氣なり、想な  
り、氣概と思想とが文章術の精神たらざる可からず、この精神を欠く、何ん

序文

明軒  
39 4 25  
内交



ぞ能く文の妙を得んや、此に於て余は、自個の作品をのみ採つてこの一篇を編したり、皆往年の舊作に屬すと雖も、余が氣概と思想との結晶體なり、その質の透明か否か、堅實か否か、善惡の評定は、自ら之を定むること能はざるなり

明治三十九年四月

著者

目次

|                   |     |
|-------------------|-----|
| ◎文章術……………         | 一頁  |
| ◎『モテレーション』の説…………… | 一八頁 |
| ◎惑……………           | 二七頁 |
| ◎『遊子』を讀みて……………    | 三二頁 |
| ◎袖ヶ浦の落暉……………      | 三八頁 |
| ◎時局と文壇并感想……………    | 四四頁 |
| ◎谷中塔下の思索……………     | 六四頁 |
| ◎『運命觀』を評す……………    | 七四頁 |
| ◎花……………           | 七九頁 |



目次

- ◎ 人生の意義……………九三頁
- ◎ 銀月と日本史及百字文……………一〇七頁
- ◎ 上野の半日……………一一八頁
- ◎ 思想の變遷……………一二七頁
- ◎ 戦時所感……………一四五頁
- ◎ 思ふまゝ……………一五六頁
- ◎ 『書籍新報』記者に酬ゆ……………一六七頁
- ◎ 余が文壇觀……………一七三頁
- ◎ 家島の記……………一九三頁

以上

中學應用

新作文

（一名余が文集）

文章術

其一 序論

湯朝觀 明著

こゝには、題して『文章術』と致しましたがけれど、或は『文章學』と云ふ

方が、適當で有るかも知れませぬ、そは何れに致しましても好しい、兎に角『文章』と云ふ事に就て、私が、只今懷抱致して居る感想を、記述して見や

文章術

二



うと思ふのであります、けれども、紙數に制限がありますから、ほんの、大略に過ぎませぬ、其の積りて御覽下さい

文章を作ることとは、一種の學問であり、技術であります、而もなか／＼に容易ならぬ學問であり、六ヶ敷い技術であります、けれども、東西の世界に於て、往昔より傳へられたる斯道の事として、今更に始まつたる學問技術とは違ひ、今日に至るまでの永い歴史と、多くの經驗とがありますから、文章に就いて説を立て、論を議することは、何人にも出來ぬことは有りません、私の所論として、格段異彩を放ち得る程に發明する所あるのでは無いけれど、文章に關する、自分の考を述べて天下に問ふも無益のこととは思ひませぬ、

若し夫れ、この記事を見て、幾分にも利益を得たと云ふやうな讀者があるかも知れぬ、つまり、斯道研究の一助となれば、それで好のであります

文章術の六ヶ敷い者で有ると云ふことは、誰でも知つて居る、六ヶ敷いとて捨てて置く譯には行かぬ、さすれば如何にするが好いか、即ち研究するの外は無い、さらば、この研究また甚だ肝要と云はねばなりません

## 其二 天稟と修養

思ふに、文章術の天才とでも云はれる位の者は、必ず天稟であらう、天賦の性が、成功の過半を持つて居るのでは無からうか、或る學問、藝術等に於



ける彼の天才と云はれるやうな人は、先天の持ち前なのでは無からうか、  
ろれでは、産れ付き文章を作ることの下手な者は、修養しても上手に成るこ  
とは出来ぬかと云ふに、決してさうでは無い、修養すれば、修養しただけの  
結果は屹度現はれて、上手になることは至當の道理で、また事實であります  
併し乍ら、いかほど、修養しても、修養によりての成功と、天才の成功とは  
自ら一般の認むる所が違ひます、天才の羨望す可く尊重すべき所以は、乃ち  
こゝにあるのであります

けれども、天才と云はるゝ者は、そんなに澤山にあるものではありません、  
ダイヤモンド金剛石が濱の真砂ほどにあらば、最早金剛石の尊さはありません、天下稀有

なる所、天才の天才たる価値があるのであります

所が、生れながらの天才が、學ばず習はず勉めずに、渾成の妙文を作る者  
かと云へば、決してさうではありません、天才とても凡人とても、共に修養  
の必要は勿論のことである、拙者は天才だからと云ふて、學ばず努めねば、  
その人、終には凡人化せずには居らぬ、かく思惟し來らば、何人が天才たり  
凡人たるかは、一定の修養期を過ぎた後ちて無くば、判断することは出来ま  
せん

若し自棄して、拙者は天才で無いから駄目だと諦め、修養を缺くならば、  
その人は自分で自分を發達せしめ無いのであるから、自愛自重心の無い人だ



と云はねばなりません

さすれば、天才だに、猶ほ修養を要するものとせば、凡人は、層一層の修養を要するのである。この人もし不斷の精勵により、其の修養より、凡人一變、天才の玉座に乗ることが出来るかも知れぬ、天才が途中凡人化し、凡人終に天才と成るも、一に修養如何にありとせば、文章術に於ける天才たると、凡人なるとは、自分の精神如何に依ると云はねばなりません

### 其三 氣概と思想

文章術の精神は、氣概と思想とて有らうかと思はれます、氣概と思想とが

無ければ、逆も文章を達者に書き得られるものでは有りません、況して文筆を以て世に立たんとするには、特にこれが必要なのです

氣概が無ければ、文を作る勇氣と趣味とを得られぬ、机に向つて筆を執ることが物憂く成る、思想が無ければ、書くことが出来ぬ、文字を列べる事柄が無い、ある問題に出會ふて、その關係を知り、その判断を定め、それを世に示し人に看せるには、そのことを述べ得るだけの思想が無ければ、文を綴ることは出来ぬ、氣概が無ければ、自分の思想を傳へ、また遺すことが出来無いのであります

人間の尊い所は、自分の樂い思ひを他人にも分ち、他人の失敗を見れば、こ



れに同情を表はして又奮發せしむると云ふ、情と情との相感、知識の交換にあるのであります、文章なるものが、即ちその交換の一の要具なので、文章の効用は、そこにある、人間が犬や、猿と同じやうなものだとすれば、七面倒臭ひ文章なんかは、何の要かあらん、と云はれませう、けれど、人類は相互に和合、交際等によりて、向上と幸福とを受くる様に造られて居りますから、身體によりて表情的作用を成し、言語文章によりて、知識、感情の交換を成し得る様に出來て居ります、其の交換機關の中で、現在最も多數の人と交換し得る者、將來にまでも自個の抱負を遺し得る者は、唯この文章の一具あるのみでありますから、文章術の精神如何と問はゞ、先づ氣概と思想

とであると、云は無ければ成りませぬ

#### 其四 精讀と精作

文章を作りかけて、何人でも其の六ヶ敷いことを悟り、如何にせば上手に作られるで有らうかと、思はぬ者はない、これを教へ諭すに、古來多讀と多作とを以てしたのです、作文の捷徑は、作文の書を澤山に讀んで、見たり聞いたり感じたることを、澤山に作れば好いと云ふのである、なるほど、これも悪くは無い、けれども、私の考へは、多讀多作では無く、精讀精作なのだ、能く讀み、能く作れ、善く讀み、善く作らんことに苦心



せよ、と云ひたいのである。同じ讀むにしても、先づその讀む可き書を精選せねばならぬ、あれもちよいと讀みかけ、これもちよいと看ると云ふ風では爲めになるのが薄い、それよりか、先輩に尋ね、書物で驗べて、この書は如何なる書であつて、思想が健實であるとか、文字が豊富であるとか、文學的傑作であるとか云はれる、所謂千古の文章、萬代不朽の妙文と稱せられて居る書物を、暗誦の出来る位に精讀するのが、文章術の第一義であり、且つ他日の基礎となるのである。第二が、精作である、これは、見聞にせよ、感想にせよ、矢鱈に造作無く作り、無暗に苦心無く作るよりも、たとひ一章一篇たりとも、苦心をし、

精根を盡して作るのである、これが作文稽古の最も大切なことで、他日一人前の文章家と成つて、すらり／＼と筆を走らし得る愉快は、この精作の素養より來るのであります。

#### 其五 思潮の觀察

血の通ふた肉の有る文を作らうとするには、古書を看破すると同時に、現代の思潮を觀察せねばなりません、思潮の觀察より得たる思想を以て、文章一貫の骨格とせねばならぬから、或は新聞紙、雜誌、其他新刊の書を見て、時代思潮を觀察することを忘却してはならぬ。



傑作だと傳唱せらるゝ往昔の小説を讀むより、今日の普通の小説を觀る方が、何んとなく面白味の強く、感興の深い氣持のせらるゝは、この道理があるからである、必ずしも文字の使用、文體の變化のみでは無い、まして、文章は、時代々々に變遷して行くものであるから、新思潮の觀察は、必要なる條件として數へねばなりません

現に、隨分立派な文章の書ける人でも、その思想が古臭く、文と想とが調和せず、卷繪の重箱に馬糞と云ふやうなのがあるではありませんか、これすなはち、時代思潮の觀察眼無きより生じたる缺點であります、けれども又、新らしいことばかりに傾いて、過去を顧み無いと云ふも缺點である、故を温

ねて新らしきを知り、今を見て古を考ふる杯、ともに必要な事であります

### 其六 冥想腹案

先づ文章を作るに當つては、何事を如何様に書く可きかと、沈思一番の必要がある、これを冥想とは云ふのである、其の冥想で得たことを大體腹で組立てる準備をするのである、これを腹案とは云ふので、この冥想腹案さる出來れば、筆を執つて紙面に臨み、さほどに苦勞のあるものでは無いのです、然るに、これを成すを知らず、たゞ無茶苦茶に筆を持つて机に對つても、腹に何事を如何に書く可きかと大體の組織が立つて無いから、どういふ風に



書いて行けば好いのか、薩張り手の附け所が無く、終には、工夫に勞れて文を成すこと能はぬやうになる

全體、文は冒頭が大切で且つ困難なのであります、初めから筆尖ばかり見詰めて居るやうでは、とても活躍したる文の出来やう筈が無い、長文ならば猶ほ更のこと、たとひいかに短文なりとも、一篇の主義と手順とは、考へて置かねばならぬ

つまり冥想腹案によりて、文章は既に一度び、自分の腹の中で作られたものでなければならぬ、そしてそれを文字に現はしたのが文章なのであるから、この冥想腹案の修養を、文を作る毎に經驗して見ねばなりません

### 其七 結論

文章術に就いて、詳敷く説明すれば、一冊の書物に書かねばならぬ、けれど大體肝要の注意は、如上の説明によりて差支は無からうかと思ひます、それ以上のことは各自の勉強次第で、幾程でも研究の仕様はありませう

されど、餘り文章の作方はかりしらべ過ぎて、肝腎の文章が作れ無いと云ふやうでは馬鹿々々しいことであります、昔から文法學者に歌人無し杯と云ふて、てにをはだとか、かゝり結び杯にやかましく云ふ國學者よりも、却て文法を知らぬ人に妙文が出来たり、秀歌が詠めたやうなものであるから、專



問の人で無くば大體に通じて居れば、決して差支は無いものである。稽古中ならば、人の作を換骨脱體して見るもよからう、模倣も宜しい、文法だとか語格などに魔誤附いて筆の延びぬは却つて進歩を害するものである、初心の間は能くある習ひだが、面白さうな故事、六ヶ敷さうな熟語を知ると、早速それをどこかに使つて見度くてならぬ、そこで文章全體の思想をお留守にして、故事、熟語を當て箝めやうとする、例の木に竹を續ぐの所以、これらも能く注意せねばなりません。

人は自個以上を語る能はずで、自分の今日までに覺るることより以上のことは、云はれるものではない、自分の頭に無いことを書きたがるから、餘

計な苦勞をして得る所は無いのです、そんな龍頭蛇尾的の不手際をして人の笑ひを受けるより、起承轉結よく鹽梅して、誰が見ても、一見直ちに一篇の旨趣を諒得して呉れるやう、また好んで自個の文章を愛讀して呉れる程の特色を發揮するやうに、實力の進歩と共に、漸々に文章術の發達を努むるがよろしいのであります。





## 『モデレーション』の説

○吾人は、曩日、吾が『萬朝報』の言論に、先覺の垂訓『デリケシー（優婉）の説』を聞き、清涼の興奮劑、慰藉謂ふ可からざりき。

○蓋し、『優婉』の徳は、人倫ヒュマニティーの全部には非ず、然れども、情的フィージングの美は、總てこの『優婉』の心ハートより湧出する者なり、ハミルトン曰く His head is seldom for wrong, whose heart is always right. (情の正しき人は其の智慧も亦自ら正し)と、されば『優婉』の徳を備ふるの人は、男子としては、紳士たるの精神を保ち、女性としては、淑女たるの性格を有する者なりと稱するに足らん

○吾人は、邦俗古言、『奇麗好き、夜は至つて醜行好き』を聞きたりき、又、マツケイが A nice man is a man of nasty ideas. を記憶す、俱に極端に謂へるが如くなれども、今のハイカラーを諷し、卑劣の小漢を嘲せるに似たり

○社會の模範、一世の上流に標置す可き、我邦の紳士及び淑女は、其の形式に於て、稍々『レファインメント（淑雅）』たらんとに苦心し、焦慮せる者の如し、彼等が争ふて誇らんとするサムシングは、恰も西京伏見の名産の、競ふて美麗の彩色を矜る土人形と相ひ均し、勿論、吾人とても、醜汚よりは奇麗を好き、非潔癖家よりは潔癖家たり得ん、然れども、彼等は其の内實を顧省せて、唯外面にのみ苦慮す、以て、古來、笑にのみ價するに過ぎざりしなり



○茲に於て吾人は、『モデレーション』の説を述へんと欲する甚だ切なり、試みに次の一句を誦せよ Moderation is the silken string running through the pearl-chain of all virtues.—T. Fuller. (中庸は道德の神髓なり)と、誠に然り、『モデレーション』は、『中庸』なり、『中和』なり、『程の好い』のなり  
○惚れられんとして、頭の髪分けやうに心を配り、色や、はた柄や、さては下駄の鼻緒の模様になて、彼女が破顔微笑を買はんと焦心る奴は、夢、惚れられ得ず、そは、本統の、『程の好い』ので、非らざればなり、さる奴に惚れもせん女の有らば、彼女は、まだ色氣無しなり、艶消しなり、『金縁高帽ありや、餘所の人、めくのもじりは、こちの人』なり、極端ならぬ所に、趣

は存し、平凡飾らざる邊にこそ、通の本領は在る可きなれ

○『君子盛徳あつて容貌愚なるが如し』、眞に、棄て難きは、平凡洒落の徳なり、吾人は、専ら『キザ』な奴をして、力めて吾が家の『サクイ』人に同化せしめんことを願ふ

○『中庸』に『中和』を説明して示す、『喜怒哀樂之未發、謂之中、發而皆中節、謂之和、中也者天下之大本也、和也者天下之達道也、致中和、天地位焉、萬物育焉』と、永世に傳はりて變らざる吾人がモラルの標準は、其の本源をこの『中和』より發せり

○世は、偉人の出現を唱へ、人は、英勇の趨拜を稱ふ、シイザル偉人か、非也、



ナポレオン英勇か、非ず、吾人が所謂英勇的偉大は、數千年の昔、慈悲を宣布し博愛を唱導したりき、彼等は餘蘊無く、人心自然の妙義を廣闡せり、彼等の聲の前に耳立てて、吾人は、哲學的思索をも要せず、科學的研究を爲すの用もあらざるなり、そは、自然の聲には曇り無く、彼等の聲は、自然の聲に違はざればなり、吾人は、今の時に臨んで、偉人を呼ぶの愚者たるを忍ぶ能はざるなり

○聖者が自然の音聲と、吾人が天然の氣呵との一致が、吾人の歩む平和の大道たり、天の吾人に賦與したる、『光明の風景』なり、眞個、『程の好い』とこの風景に及ぶ者、天下に復と在る可からず

○『らしく』の一語、人皆知る、たゞ守る者は一人もあらず、兒童は、『兒童

らしく』あれよ、小女は、『小女らしく』あれよ、紳士らしく、淑女らしく、政治家らしく、教育家らしく、實業家らしく、而して夫れ『人らしく』あれよ、『人らしく』あらん者は、『程の好い』人なり、『人らしく』あらんことを冀ふの道は、拳々、『中庸』の服膺に若かず、簡潔明諒、何たる警句ぞや、『らしく』の一語、『中庸』の二字

○浪は静まらんと欲すれども、風これを妨ぐ、風一度び止めば、浪は平和湛然の水に歸して『程の好い』と比譬無し、何んの由に、水の此の如く、夫れ、無邪氣なるや、吾人は、心に於て、舌に於て、手に於て、絶えず、規を逸し、寤寐、偏に傾き、念々『中庸を』持たんに困む、何の故に、人の是の如く、夫れ、



無邪氣ならざるや

○倩々想へば、水は自然を心とせり、自然は眞實の神聖なり、豈、殺し、盗み、姪し、妄語し、飲酒し、自讃し、毀他し、慳し、瞋し、收賄、詐欺、諂し、畏し、譎詐、偽善等の罪害を知らんや、乞ふらくは、吾人をして『光明の風景』に歸へらしめよ、淨き自然の心を心となさしめよ、無心の水、誰か、他山の石たらずとせんや。○うたてやな、いづこも同じ用の人の子や、金を蓄へんとて、數多の人の血を犠牲の淵に溢らし、名を上げんとて、社會の人の子を毒し、只管に爪牙を逞うして一步も假さず、吞噬折伏、貪慾銜氣、急ぎ壽命を縮めんとてや藻搔く、小人、世に在る、あたら、猶ほ無きに若かず

○山の如く黄金を積みて、果して何んする者ぞ、名聲を人に頌はれて、價値幾干ぞ、雨に降られ、裳を掀げて徒跣と爲る女は、主體よりも附屬品を可愛がる非眞人なり、金を持ちて爪弾きされ、名を成さんとして道を踏み誤り、揚々乎たるの輩も亦非眞人なり、而も嘆ず可し、現下の人、滔々皆然らざる無さを

○吾人は、二十餘歳の今日に到るまで、金に縁遠く、名に望みを有せざりき然れども、唯一、『美』の思想にのみ、憧憬したりき、吾人は、力強き『美』の神に虜られたりき、傍目も振らず、美的感想の謳歌に奔命是れ疲れ、父を惱まし、母を泣かし、自らも亦立つ瀬を失ふて、人生のオーソリチーを蠱惑



し、世に在る、寧ろ無きに如かざるの悲鳴を放ちたりき、嗚呼、今の時に當りて、吾人は頻に悔む、其れ『中席』を逸したるの鈍を○ざりとてまた、吾人は、無味淡々、薰香も焼かず、屁も放らざる底の、凡人たれよと謂ふには非ざるなり、氣は平にして、心は温かなる可しと鼓吹するなり、然も、才は飛んで、天鳥空を突くの概無くんば非ず、情は流れて、春風氷を解くの趣有らんことを欲す、宜なるかな、ロード、リットン曰く *As man's genius to him, is woman's heart to her.* (男子は天才を尊び、女子は情を尊ぶ)と、夫れ、中心は『程の好い』軸に貫かれて、男は、縦横に天才を夫れ伸ばし、女は、無盡の情を發揮せんかな

惑

蹶起奮然、無冠の宰相を志し、寧日羸然、東西を奔走して犬馬も番ならず、終夜喘々、編輯樓上に兀々たり、首を垂れて過去を顧みれば、夫れ、唯、唯、腕を拱きて既往を考ふれば、夫れ、唯、幻！、噫、吾人、豈、幾分の惑ひ無からざらん哉

深く、將來の理想を觀ずれば、前途遼々乎たり、情々、目的の境地を念はんか、彼岸漠々乎たり、吾人、轉、其遠きに惑ふ

父は、吾人が成功の日を屈指し、母は、吾人が立身の時を夢む、吾人、晚



成を期して、理智の修養を勉む、されど、學海渺茫、父の老するを止め難きを如何せん、吾人、成功を禱りて、藝能の進歩に力む、さあれ、世事紛々、未だ母を安んじ能はざるを如何せん、嗚呼、惑ふ、吾人、一身の向ふ處を

吾人、黄口にして、新聞記者を熱望す、赫々たる『記者』の稱號は、吾人が羨望の頗る切なる處のものなりき、近時、其の關門に投じ、忽にして酷だ倦厭の情に迫まれ、自ら、惑ひを止め得ざるに到る

『新聞』や、天下の耳目を標榜し、『記者』や、『警世の木鐸』を自任す、其名甚だ大、其任また輕からざる可し、然れども、文を作りて意に乖く事なきか、情を曲げて筆を遣る事無きか、侃諤の議論、必ずしも記者先生の主義には非

ざる無き乎、堂々の威儀、必ずしも家庭内實の不足と相應ぜざる無き歟、世人も亦思ひ半ばに過ぎん、吾人、惑はざらんと欲するも得べけんや

社長閣下、綺羅を纏ひ、袖手倚榻、時に祕密の策を案じて黄金を握り、編輯長足下、出入車有り、來訪の客絶えず、誰か、交際の廣さに驚かざらんや、主任記者、吾人を頤使用する、恰も機械の如く、更に同情の念無し、吾人は、數錢の辨當に由りて、空腹を醫するに足らず、同輩に小錢を徵集して、幸に燒芋の賜を辱ふす、可憐、寧ろ、嗤笑の因たらん、吾人、惑を晴らす能はず

秋天、暮れを急ぎ、電燈、四時既に輝く、車輪軋軋、轟々白聖の洋館を搖がせ、文撰植字、囂々耳朶の鼓膜を擘く、電報飛び來り、電鈴音を絶たず、



小僧、校正を促す頻々、小使、階上階下に走る、その繁、その忙、吾人、殆んど堪え難きに惑ふ

一朝、要領（金銭の自由に接せし時の記者用語）を得て、新橋橋畔、ピアホールに陶然酔を買ひ、銀座街道、跟々歩を散ず、功名それ何するものぞ、修養甚だ愚ならずや、六合の崇拜、唯、黄金の光、人間の目的、唯、美人の艶、この光、克く人を活かし、この艶能く腸を斷つ、是に於てか、吾人、また惑はざる可からず

車馬往來を停め、商沽店窓を閉づ、白露柳樹に滴り、紅塵脚下に收まる、天穹朗々鏡面の如く、嫦娥皎々電光を奪ふ、吾人が六根は光明の鮮空に蓋は

れ、吾人が五管は、清澄の冷氣に撃たる、この間、吾人、記者を忘れ、この時、吾人、黄金を思はず、この折、吾人、豈、窈窕美人を念ふの暇あらんや、中天の月光と、地上の吾人と、感應融通して、清淨無垢たり、月光影淡くして萬象を照らし、吾人思邪無くして自然に同づ、そもく、什麼の妙術に由つて、斯くの如く、夫れ然る乎、嗚呼、吾人、また、こゝに、是を惑ふ、噫





『遊子』を讀みて

秋天高く澄みて、萬籟蕭。白露香しく冴へて、夜色沉。乾坤寂滅に入つて、神氣自ら豁き。燈下書見に耽る、また、至樂の極と謂ふ可し。

書卷堆積室に満てども、讀破閱盡將に餓ゑんとす。詞壇の友、梅溪高須君、曩日の著作『遊子』一冊を送り來り、今、机上に供へらる。誠心を以て是を看るに、字々涙を迸し、句々聲を發す。友人熱情の作、遊子流浪の山人をして、轉、感慨に堪へざらしむ。乃ち、排悶遣興の情、一氣この文を作る。

『遊子』は「アカツキ」の第七編にして、七十九頁の小冊誌なり。首尾の趣

旨、梅溪君過去歴史の一分を記するに過ぎず。されば、遊子辛苦の味を嘗めざる者と、梅溪君を知らざる人とは、流浪慘憺の難艱を嘗め盡したる、梅溪君の知己の山人が受けし感動に及ばざるや論なし。

梅溪君、君や、天才の兒なり。浪華無趣味の小天地に於て、豈、平々、凡に甘んじ能はんや。功名の念、火の如くに燃へ、成功の思ひ、勃々禁ず可からず。終に走つて、紅塵萬丈に遊子の身と現はる、君も亦天才の兒たるかな。君が理想は、文藝の王國に入りて、黄金の寶冠を戴かん事、即ち是れなりしなり。而して、了に、君は其の王國の關門に近づき、初陣の戦闘を試みんと勇奮す。君や、有爲の士なり。齡僅に十九。砲烟彈雨、激烈危険の戦陣



に立つ、苦心辛膽、以て、憐れむ可く、千難万艱、其の狀見るが如し。君も亦有爲の士たるかな。

惟ふに、『遊子』は、君が先年の孤軍奮闘の光景を記述したるものか。人よりも聽き、山人自らも知る、梅溪君は、當今青年文士の中、最も美文に堪能なる人たることを。山人、其の友を論ずるに及んで、豈、漫りに稱譽に筆を弄せんや。讀者、如し、山人が言を疑はゞ、乞ふらくは、『遊子』一篇を誦せよ、さらば、梅溪君が、如何に美文の才筆に卓絶せるかに、恐らく敬服するならん。『遊子』一卷、幽婉の孤思を湛る、眞摯の清香を漏らし、血氣の奔逸を恣にし、人事の紛々を觀ぜしむ。梅溪君一毫の美文、眞個、山人が

同情の涙を浮ばしめたり。

眞摯精勤の君は、早稻田大學に修養これ勉む、『遊子』に一層の光彩を放つも、近きに有らん。

嗚呼、回顧すれば、去年の冬、牛込の修行精舎に於て、肉を喰ひ、酒を酌み、世を慨し、人を論じ、宗教を談り、文壇を評し、胸襟を開きて快談三更に盡きざりしは、君も忘れざるならん。實に、光陰は矢の飛ぶが如く。時節は水の流るに似たり。弦月長へに輝き、菊花年々に芳し。落花流水、夫れ什麼が感ず可きか。秋風白露、君は如何に想ふぞや。

山人が老父、病勢日に危ふしと報せらる、鬼籍に上る、遠からざる可し。所



謂、人生愁嘆の極なるもの乎。然れども、近時、山人が思想は、大なる變動を起し、病床苦悶の老父を棄て、四度び東都功名の巷に投ず。東奔西走、事は意に背き。南船北馬、思ひ物に合はず。漸く、東海の濱に逍遙し、微に、呼吸を止めざるに過ぎず。嗚呼、功名の狂乎、不孝の兒歟。そもくまた、山人が自覺の全かる可きか。嗚呼、友よ、君は、山人がこの消息を何とか見る。案づれば、去年の秋なりき。學資の出途を失ひ、この東海の千葉に流れ、前進の楷梯より墜落し、貴重の修養時代を夢の内に送り、今復た幻の間に蠢動す。友よ、山人が悲聲を聽て笑ふ勿れ、薄志弱行と、君、笑ふや否や。遊子流浪の身、青山到る處に有らんか。嗚呼。

秋天いよく高く、白露ますく香し。君が『遊子』に絆され、今夜の感慨を記す。友、梅溪君、乞ふ、秃筆と燕辭とを宥せ。





## 袖ヶ浦の落暉

つれづれなる其の折々に、寓の坊っちゃんの手を引きて、いづくともなく歩を運び、あるは、おちこちの風色をうち眺めやり、偉大なる天然の崇高に化せられて、しばし、俗膽をも拭ひ、さては、無邪氣なる坊っちゃんの吐く言の葉に耳傾けて、われ知らず抱腹絶倒、音楽のごと罪無き聲に魔せられ、いっしか邪念をも拂ひ、爽快の心地して、浩然の英氣を養ふは、讀書に次ぎての余が娛樂にこそ

けふも本町の寓を出て、猪鼻臺に登る、臺は千葉町のや、央ばの東方に在り、さして高くもあらず、また廣くもなし、臺は青き草もて掩はれたる土堤に圍まれ、堤上の松樹は壁崖に翠色を垂る、あやしげなる小榻を設け、その傍へのさゝやかなる清涼亭は、風流雅客のおとづるを待つ

この亭に憩ひて、眉宇をうち開きなば、遠くは芙蓉峯の秀嶺を明りくくと手にとらんやう、又、烟波たる武相の連山、漂渺たる房州の青巒、其の影を袖ヶ浦に寫す、描されたるその碧波は妙へにして濤も跳らず、行きつもどりの亂るゝ白帆、黒烟吐いて飛ぶ漁船、いづれ興ならぬは無し、坊っちゃんのいふまゝ、こゝを去りて千葉寺へと向ふ、こゝは阪東三十三所観音の靈場なり、土足のまゝ汚されたる堂に詣で、内陣をうかがひしが、晝のゆるぎにや燈明も



あげられず、供物も捧げられず、薄闇さ様は、反つて物凄さ恐怖を起さしめぬ、門の下に老媪の床几に澁茶勸むるまゝ、腰を下して何くれとなく物語りしに、住寺の僧もおわさずといふ、境内廣濶、緑樹參差、このあたりにはまたと無き靈地とかや

千葉寺を降りて、寒川浦に行く、大橋を渡りて、溶々と緩く流るゝ都川に沿ふて、淺洲の邊に出でし頃は、午後四時半にもやあらんか、疲れたるまゝ、浪寄するなる濱の芝生に横たはりぬ

オヤ、奇麗だと、と、坊ッちゃんと余と異口同音に讚美せしは、この折の美の神に同化されて、忽然と、斯くは絶叫びしならむめる、こゝにその美觀

を文字に現はさんに、千葉寺の野路に見し弦月は、短かき秋の、早や吾等が頭上の中天に懸りて、磨きたてたる秋水の露滴らんやう白く冴えて煌きぬ、北の方には、登戸の松林と、稻毛の潮風と、翠色緑波交相ひ蒞み、瀟洒幽邃轉相ひ通ふ、南の方、上房の峰巒は、起伏昂低、脈理縦横、眞に曠懷の氣を示し、灣岬の環曲は、蟠亘蜿蜒、水湮蒼茫、實に雄拔の象を表はしつ、津々の漁家、今や夕霧に包まれんやう、浦々の漁舸、去來いと静なり、東は、千葉町一帶の屋舎鱗比して、寒川長洲の帆檣林立と連りき、西、武相に向ひては、峨眉翠黛、烟鬢霧髻、色淡墨に似て、風致掬すに堪ふたりき、この幽雅壯大の間、堰廻圍繞せられつるを東京灣といひ、袖ヶ浦とも稱ふ



晩れなんとせる秋の空いたく澄み渡り、深く拭へるがごと、今しも夕陽西  
天に落ちかゝりて、紅光迸射、暉光映發、東京灣を一貫して、黄金の輪柱を  
立つるかたあやしまれ、袖ヶ浦一望、天光水色、玲瓏輝射、宛然黄金橋をか  
けたるかといふからる

燦爛の落暉は、いまし富士の山嶺を彩りて照らしたれば、遙かにうち見や  
るに、白練の空中に搖曳するが如く、雲霞霧解、蓮峰清秀、瞳朧として天の  
明鏡を垂るゝに似たり、しかも、そのあたり、紅雲妙へに浮び、紫雲棚延き、  
皛々閃々、目ために眩む

日は徐ろに歩みて、西山に落ち、十里の波光は、澹澹碧淡の色に變り、萬

里の天穹は透徹淨瑩の月の輝く、この天然絶大の美觀、自然崇高の壯景は、  
倪黃の筆、皴董の圖にもなかるべく、アンブレシヨンの繪にもいかにや  
むべなり、坊ッちゃんも、この光景に憧憬れて茫然と立ち、吾も、この風  
色に恍惚れて、多時、ミュージズの神に魅せられつるも





## 時局と文壇并感想

### 第一 序

誰か謂ふ、文壇の事、論ずるに足らずと、夫れ文壇の觀察は一代思潮の發展を窺視し、一國人心の好尚を尋繹するに最も捷徑にして且つ直接の手段ならずや、人文の精華を知らんと欲せば、宜しく先づ文壇の波瀾に注意することを要す。

試みに昨三十七年の文壇を觀察するに、軍人が外に破天荒の一大飛躍を演じて世界驚殺の一大成功を收め得たるに反し、文士は目前の活題目を捕ふる

ことをも成さず、眞摯冥想の態度をも示さず、斯かる時に當つて、却つてその人格の高からざると修養の深からざると識見の狭き事實を發露するに過ぎず、出版界の如きも、たゞ目前の流行に驅逐され、一年保管に價するの書無く、學者の伴侶たり得る者は出でず、彼等が一定の方針を有せざる、其基礎の小ささを看取す可きのみ。

三十七年は戦争の聲を以て掩はれたりき、眼に映ずる物、耳に響く事、一として戦争の反映反響ならざる無く、二月旅順夜襲の海戦より、年末其の將に陥落せんとするに致るまでの、電報通信の瞥見を以て一年を經過したり、其間吾人が機呵に接觸して印象の記憶に存する、文壇觀察の所感を講述せん。



## 第二 時局と出版界

二月開戦以來『武裝』の聲は文壇を振動し、著述出版物の影響は戰時的面目を實現せり、日清戰役の當時『戰爭實記』に依りて多大の利益を占めたる者有るを思ひ、這度は多くの書肆相競ひて此方面に手を出し足を延ばし、『戰爭實記』『戰爭畫報』等互に競争の有様なりしかど、優者勝ち劣者敗る、終に現存して讀者の待つ有る者僅かに二三のみ、而も『實記』よりは『畫報』が歓迎せられたり、是れ戰記は『新聞紙』によりて日一日詳報を見ることを得可ければなり、而も其『畫報』とても海外より渡來する雜誌の畫報に較ぶれば、迎も見られた者にはあらねど、時局的出版物として一般に普及したるは

此『實記』と『畫報』とを最として可ならん。

其他或は日露戰爭に對する論議、露西亞及び露西亞の政治と人物とに關する研究批評、軍國人民の心得、戰時の財政及び經濟の意見、或は露、清、韓の地圖、會話篇、及び其國俗國風等の著作を促し、或は軍人軍規に屬する者、或は軍歌、或は少年讀物、或は弔祭文範、或は戰爭繪はがき、或は戰爭双五六等、紛々雜然として時局的刊行物を亂發し、而も一の特色異彩を放ちたる者はあらざりしなり。

勿論、斯かる間にも、時局に關係せざる數種の雜誌の發刊を見、實際的實用の著述は相應に發行せられ、新書は月に平均百種以上を發兌せるは出版界の



統計を撿ぶる人の皆知る所、或は科學、哲學、宗教、教育、其他専門的書類より雜書の現出無かりしには非ず、されど其講賣力の減少せしは止むを得ざる所たり。

吾人が特に注目したるは、數年前より吾が讀書界に一種の潮流的出版物を看來れることなり、そは『人生問題』『成功問題』『家庭問題』『婦人問題』及び『體育問題』等なりとす、如上の諸問題の中、前二者は其聲を遠ざからしめたれど、後の三者は武裝の聲の間隙空罅を漏れて猶ほ餘烟を滅せざりき、たとへば或は男女の研究、或は女性觀、或は料理法の如き、又或は『田ウコギ』の一時喧傳せられ、或は數年前サンダルの鐵アレイより勃興したる體力

養成術が、強肺術、強眼法、體力増大法と成りたるを見て知る可く、これ恰も、去年カーネギの成功術が一代に持て囃され、青年男女を成功熱に狂奔したると、同一の一時的現象ならん。

以上は文壇以外、讀書界全體の概觀を記述したる者なりと雖も、其の關係は文壇の波瀾と相離る可きにあらず、猶ほ又時局以外、讀書士の留意す可き出版物は、評論家として一世の重鎮と敬せられたる故高山林次郎博士の『樗牛全集』、小説家として明治の西鶴と唱はれたる故尾崎徳太郎氏の『紅葉全集』、思索字匠として天下の英才と稱へられたる故大西祝博士の『大西博士全集』は、共に三十七年文壇出版事業中、出色の偉觀と云ふ可きか。



## 第三 詩歌韻文及び短詩形文學

『武裝』の聲一度び文壇に振動してより、小説及び文學的述作の減退したるは明白の事實なりとす、文士冥想に耽りしか、あらず、書肆資本に缺乏せしか、あらず、一言以て評せば、戦争の聲に掩はれたるのみ、吾人は詩歌韻文及び短詩形の文學（平民的文學）の趨向を如何に見たるか、先づ之を述べん。

三十一文字の和歌は、殆んど其の存在を認め能はざる者の如くに思ふ、これは過去、萬葉の古調を遺愛し吟嘯して甘んずるに足れり、俳句の洒脱、川柳の滑稽、俚謠の情趣は夫れく特質固格あるも、三十一文字に於ては、吾人更に

何等の特調固法あるを知らず、貫之翁が『動天地感鬼神』底の興趣は、のんびり凡々の三十一字詩に在らずして、十七字詩の『寸鐵殺人』に存する無きか、三十一字てふ詩形の句調と語格とが、自ら吾人の所説を重からしむるの缺點短所あるには非ざるか、よしや吾人の説述の誤れるものありとするも、其年毎に退歩して平凡化せるは疑ふ可からざるの事實、三十七年また然り、彼の新派と號する者の吟詠は、舊派のと比較せば、大に嶄新奇抜の風態を發揮するもの無しとせざれど、たゞ變調異格、形式の自由に於て、舊派と相ひ異なるあるのみ、その吟詠の精神と文學的價值とに至つては、古調崇高の掬す可きは無し、こは三十七年のみにあらざる可し、吾人は、彼等が今一段の工



夫あつて、神韻漂渺の幽思玄想を吐き、以て日本特有の詩の眞成なる價値を發揮せんことを獎勵する者なれど、其形式の缺くる所、能く吾人の希望を満足せしめ得るものありや否や。

新體詩に至つては、吾人大に其進歩の希望を屬し、其詩形の性質より考ふるも、また益發展工夫の餘地十分なりと是認する所なれど、往年の旺盛は今日に見る能はず、三十七年の如きは、血沸き肉跳る底、詩人熱情の煥發ある可きなれど、吾人は朝唱暮吟の新詩を得ること能はざりしを遺憾とす。

漢詩に至つては依然として變る所無き者の如けれど、こは三十七年に於て進歩を表現せり、そは野口寧齋の『百花爛』、逐號爛として百花の艷麗妙香を

圓集し群成し、又、森槐南が『隨鷗集』を發行して、漢詩壇の復興に力を傾けたればなり、知らず、本田種竹、國分青崖、斯道超凡の詩伯、今何れに在つて吟懷の蘊蓄に忙はしきかを。

漢文の衰運と共に國文學の勢力また甚だ微弱なり、されば優にやさしき美文杯も絶えて見るこ叶はずなりぬ、吾人は我邦固有の文學精粹の神髓を嘗めんと欲して、之を今に得る能はず、漸く古人の遺品にのみ執着せざる可からずと感じ、嘆息の禁じ難きを覺ゆ、三十七年、落合直文逝く、こは國文界の雄將なりき、すなはち『萩の舍遺稿』は出てたり。

平民的文學、所謂、俳句川柳の如きは、年一年昌運に向ひ、新聞に雜誌に其



旺勢の流行を見ざるは無し、これ等は誠に日本人種が趣味の嗜好に好適したる一種特別の詞藻を格調とし、謂ふ可からざるの妙味を含有せり、川柳の如きは三十七年度に於て最も其流布を弘めたり、又百字文、はがき文學なる者も、此年の産物と云ひ得べきか、この年、俳匠古老永機翁逝く。

吾人常に思ふ、世界の文學を比較して、歐米の特長は『知識』に現はれ、支那の特長は『文字』に知られ、我が日本の特長は『情趣』に於て見ることを得可しと、試みに其各國の詩歌を一誦せよ、必ず吾人と同一の感を起さん。

西洋の詩に通じたる一道の精神は、希望にあり、奮躍にあり、奇麗なる人情美にあり、崇高なる哲想にあり、なべて慰藉せしめ、活奮せしむるが多し、

支那の詩に通じたる主なる特色は、文字の瑰麗にあり、詞藻の豊富にあり、句調の婉轉にあり、語格の莊重にあり、即ち彼は精神思想に見る可く、此は文字詞藻に勝る、翻つて我が日本の『情趣』に富み、長じ、優れたる所以を知らんとせば、謠曲、淨瑠璃等、聲曲の妙詞は云はずとも、彼の小唄、端唄の如きに耳を傾けよ、馬士の歌、船頭の歌、さては子守の歌に耳傾けよ、なほ横町に於て、湯屋に於て、それドド一に耳傾けよ、また彼の洒落に知れ、樂書らくがきに見よ、吾人の所斷、必ずしも多くあやまらざるを悟らん。

吾人は、日本人種が、固有の嗜好に恰適なる、文學的趣味に附きて、多少の研究を成さんとかねて心掛けつる者なり、頃日閑を得、數種の新聞雜誌を



集めて、讀者の娛樂感興に供せる題目をのみ抜記したるに次の者あり、これを見て、邦人一般が共有せる文學的趣味の如何を知るに足らん

- 一、和歌
- 二、新派和歌
- 三、狂歌
- 四、新體詩
- 五、漢詩
- 六、狂詩
- 七、俳句
- 八、狂句
- 九、川柳
- 十、端唄
- 十一、都々逸
- 十二、俚謠正調
- 十三、短歌
- 十四、百字文

- 十五、ハガキ文
- 十六、投書文
- 十七、一口噺
- 十八、語呂合
- 十九、謎々
- 二十、考へ物

此の如く多し、無論之をしも、皆文學的趣味と云ふは甚だ大袈裟に聞ゆれど多少の思索を勞して文字に關繫する者なれば、吾人が本意を斟酌して誤解せざらんを要す、而して三十七年戰爭最中、なほ斯の如き短詞形にまでも、國民が敵愾の氣象は現はれたるなり。

第四 小説脚本評論及び二文士三文豪

小説も亦開戦以後、目立ちたる者、一も非ざりき、定期刊行物及び新聞掲



載の外に、單行本として出てたる者も無く、脚本、翻譯物の類も取り立て、云ふ可き者無し、されば自然の勢ひとして、文藝の時評も振ふの理なく、總ての作物が大抵時局に當嵌んとての一夜作り、世界の舞臺に雄飛せる現下の日本に、日本文士の『戦争文學』は茲に有りと標榜し、提舉し能ふ程の者はあらず、遺憾の極みと謂ふ可きなり。

評論及び思潮壇に於ては、黃禍論、非戰論、未亡人再婚可否論の如き、一時的たりとも侃諤されたる議論なりとす、其の他一代衝動的の論議の沸騰はこれあらざりき、戦争の聲は、戦争國民の微言さくやまに聲高めしめざる者かや。

以上、吾人が所論は、餘りに概括に流れ、餘りに抽象的觀察たるに似たり、されど、一々題目を捕らへ、一々作家文士の名を列べ、具體的評論を試みんと欲すと雖も、更に吾人に何ら感興の無く、興趣の無く、氣呵の無く、心胸奥底の琴線に觸る者あらざるを如何せん、さりとして、吾人は三十七年の文壇を悲觀し、又作品文士を尊重することを忘却し、又自ら不平を抱く者にもあらず、たゞ戦争の聲高く、武装の聲大なりしかば、三十七年の文壇は、戦後文壇の豫想をのみ考察せしめて、天才渾成の傑品を得ざりしは、吾人と共に、何人も落莫の感無しとせざる所たらん。

此に記掲の必要あることは、三十七年の文壇に、二文士を失ひたることなりとす、而も二士共に天才と稱へられ、異才と唱へられ、狂人、變物、その



文の奇抜と共に、性格行爲の常軌を逸脱し、その死や、また甚だ其の人の本領と平素とに一致表現されれば、深く吾人の感情を動したる者あればなり、そも二文士とは誰ぞ、曰く、緑雨齋藤賢君也、曰く、抱一庵原余三郎君也、

嗚呼、緑雨は貧に死し、嗚呼、抱一は狂に死す。現代に三大文豪あつて、無味枯淡、落莫肅條の三十七年の文壇にも、異彩赫耀、鋒鋩尖銳の大手腕に憧憬したることを思はざる可からず、但しこは余

が多年懐抱の幾分を、この機を得て記するものなり。現代の三大文豪とはそもく誰ぞや、曰く逍遙也、曰く涙香也、曰く露伴也、この三先覺は彼の滔々たる吹けば飛ぶ的木葉文士の如く、名を賣らんが

爲めに筆を執らざる也、金を得んが爲めに文を書くに非らざる也。

露伴が『天打つ浪』を見よ、その思想の幽遠なる、その文章の雄大なる、時局に鑑みるあつて久しく中止し、年末に臨んで再び筆を執る、三十七年の文壇を飾りて、綽々餘りあるにあらずや。

涙香に見よ、多年一日の如く、翻譯一宗を守り、十數年來の久しき、卑近なる探偵物より、終に世界の傑作エゴの大作にまで及び、讀者の知識感情を薰化し啓發し來り、以て人生奧秘の眞味を啓示し開發し鼓吹せんとす、『小説』も、茲に至つて、眞成の妙味と意義との存することを知られ得るなり。



逍遙に見よ、『當世書生氣質』『小説神髓』を著はし、明治小説の開拓先鞭の功を以て文壇その名を恣にし、十数年の後『桐一葉』『牧の方』を著はして脚本の模範を垂れ、爾來、早稻田學堂に倫理を講演して子弟教育に従事し、文壇を避けて筆を執らざる正に十年、而も筆を揮へば三十七年揮尾の傑作『新曲浦島』の如きを出す。

今の世の文士、作家、能く三年の沈黙に堪へ得るや、十年沈思、この傑品を渾成す、眞個吾人が龜鑑たり、鶯鳴き、人は春を知る、逍遙新作を出せば、文壇是れに傾倒し又覺醒す、明治文壇の豫言者、先達、三十七年の文壇は戦争の聲に掩はれ、掩はれたる儘に歳行かんとするに當り、『新曲浦島』の聲

頓に讀書界の全域に鳴り渡り、吾人はしばし、戦争の聲に遠ざかりたるかの思ひせざる能はざりしを欣ぶ。

この三文豪あり、共に健在なり、文壇また安んじて可なる可し、豈、たゞ三十七年三十八年のみならんや、而も三先覺は共に其の實力の豊富なる、修養の深博なる、人格の高潔なる、その人、既に一世感化の靈力を有する所たり、嗚呼、文は夫れ末技か、文を習はんとするの吾人は、先づ先覺の人格に化せられんことを努めざる可けんや。



## 谷中塔下の思索

(一)

小さき希望なれど些も満されず、意氣地無しとは謂へ、不平譬へ難し。歳こゝに暮れなんととして、五尺の小身、寄する處を知らず、豈、安き心地のせん哉。東京方四里、幾萬の士、蓬頭の山人を見るとも、誰か一語を交ゆるものぞ。餓ゑたる山人、幾千の門を叩きて、容易く一宿を求め得んや。東都地便利、人力車を挽くも易し、紙屑拾ひも亦面白からむ。要は、手段に、齷齪して本意を躊躇せず。脱兎の勇、迅く疲るよりは、寧ろ、牛に習つて、終始、

怠らざるに、夫れ、如かず。蓋し、自ら勞して食ひ、自ら働きて飲む、是れ、人生の第一義也。而も、須らく固く、向上の目的を逸す可からず。

三十五年十二月三十一日午後十時、帝都市中の光景を観る。肩摩穀擊、車馬縦横。紅塵空に漲つて、星光皆隠る。町は混亂を極め、人は奔走に忙し。賣る者は店頭火鉢を擁して叫び、買ふ客は蝦蟆口を量りて品物の高下を撰ぶ。錢無き山人の如きは、殆んど耐ふる處に非ず。借を拂ふも本日、掛を集むるも今夕。一年中の帳仕舞ひ、メを計算して棒を引かんと焦慮り、福引、割引、大安賣。あらゆる策略を設けて、能ふ丈け金を掴まんと藻掻く。山人間に思ふ、斯る喧轟狂態を敢て爲すは、怠慢不規律の然らしむる處には非ざる無き。



乎と。秩序を守らざるは邦人の常なり。收支出入、是を日々に爲可し、福引、割引、業に勵む大に好し。是れを歳末にのみ限るの理有らん哉。恒に精進してこの勇を奮はざる可からず。由來邦人の性質たる、或る時は怠慢に逸し、或る時は強慾に狂ふ、是れ恒の心の無ければ也。焉ぞ、恒産を作り得べけん哉。

(二)

歩を上野に向く、山王臺上人影無し。柵に倚りて萬都を眼下に一瞥し、こゝ英勇を氣取つて呵々一笑を放つ。南洲の像、彰義隊の碑を過ぎて奥深く進み、漸く人寰の俗を脱す。幾も無くして、いつしか東照宮の鳥居に入る。萬

籁寂々、夜色沉々。燈籠の影かすかに照り、五重の塔黒く立つ。破れゴム靴敷石に聲無く、念ひ稍々静まりて情自ら浩し。今や、詩美に絆されんとして、鏘然鐘聲に驚かざる、こは、東叡山裏十一時を報ずる也。段階を降りてやがて不忍池畔に出づ、試みに垣根に添ふて池を一周す、歩を拾ふて正に二千二百五十一に達せりき。

後また、くらがり阪をたどり、谷中の墓地に運動す。墓地は夫れ別世界、遙かの奥に燈火一點青く見ゆ、一直線に進む數百歩にして塔の下に到る。樹木鬱として茂り、碑石寂として眠る。一天の色は灰の如く活氣を消し、五重の塔は闇に沈みて妖魔を宿すかと危まる。北雨颯として落葉を吹き、鬼氣蕭



谷中塔下の思索  
 心機平常に持たんと欲すれども得ず。嗚呼、是れ奈何の  
 として山人を襲ふ。牛馬絡繹、馬糞堆積、紅塵軒に飛ぶなる銀座街道に行か  
 理ぞや。若し夫れ、往復終日、人皆厭ふ事を知らざる也。谷中の  
 んか、體裁を粧飾して活歩し、擴瀾行くとして障る無き也。然るに、  
 慕地や、空氣清澄にして靜幽自ら閑、聲を高めて吟嘯の膽を示し能はざる  
 何ぞ夫れ、手を振つて活歩の勇を鼓し、意味の存することを觀じたりき。其  
 や。山人は、こゝに、いたくこの墓地に意味の存することを觀じたりき。其  
 の意味こそ、山人が知らんと欲して、何物にも較べ得ざる、絶大無量の價値  
 を有する處の者たる也。銀座は平凡にして俗也。こゝは思索の趣味を以て包  
 まれ、詩的感呵、さては、靈的感想を湧噴せしむ。

人は、産む事を樂みて、老を悲み。生を欣び、死に泣く。そもく、是れ  
 奈何の理ぞや。垢穢の骨、惡臭の血。谷中の墓石と成りて、眞個、高潔の氣  
 を表し、莊嚴の威を發する者にあらざる無き乎。然れども、山人生を解せず、  
 爰ぞ死を知らんや。山人は、今、何を思ひ何を爲す可きかに惑ふ者也。山  
 人、自己が分際を識り得ず、自己が價値を辨へ能はざる也。至愚々々、滑稽  
 の極と謂ふ可き乎。否、寧ろ、悲嘆頻りに迫り、慟哭聲爲に出でざる也。自  
 問自答、又は疑、又は悟。悟忽ちに逸し、疑倏ちに襲ふ。悟來れば歡び自ら  
 浮び、疑來れば苦直ちに集まる。山人は、自己が何物たる乎を知らんと欲し



て得能はざりき。煩悶の極、呻吟鷓鴣を脅し。苦悶の極、血涙流れて滂沱たり。茫然自失、恍惚夢幼の境に落ちんとして、髓、寒に刺されて覺む。身は五重の塔下、苔厚き碑臺に跼したりき。腕を撫し、目を開き、立つて墓柵を逍遙す。左右、遠近、百八の梵聲、空氣を振動して走り馳る。梵鍾一聲、歳こゝに代り。乾坤一轉、日まさに改まる。歳代りて吾人は一歳を老ひ。日新にして、山人は一日死に近づく。人間を載する天地は、千變萬化、時々回転して常に靜定する期無く。天地に蠢めく人間は新陳代謝、刻々に生滅して長へに安住する處無し。不思議なるかよ、天地の相。可笑きかなき、人間の世。

試に人間死せずんば什麼。樓屋人を以て滿され、子の年は萬、孫の歳は千。人と人と相ひ軋轢して皮膚爲に破れ。骨と骨と相摩擦して火を發して燃え。海中魚貝に溢ふれ、軍艦は魚鱗の背を滑べらざる可からず。空中鳥糞を以て塞ぎ、日光爲に蓋はれて、世は闇黒の魔界と化せんかな。さらば、嗚呼、如何に夫れ滑稽なるかよ。

(四)

世は代也、變相ならざる可からず。變は動也、動は運行也、回転也、活動的也、豈、平凡の天地なるならん哉。人は意也、靈的ならざる可からず。靈は不可滅也、不退轉也、勇猛的也、希望的也、向上的也。豈、滑稽の物體な



るならん哉。  
 天地は、熱性的火力の原動に焼かれて燃る。人間は向上的進歩の理性を啓  
 發して活く。吾人は先づ、宇宙神秘の戸帳の幕を開き、それが實在を認識して  
 活動の價値を了得せざる可からず。而して次に、吾人が自己本然の自覺を悟  
 諒す可し、是れ即ち、人生の目的。向上的進歩の理智を開發する根本の動機  
 たれば也。此に於て、科學哲學の進歩を促し、宗教倫理の誤謬をも訂正すべ  
 ければ也。而して吾人は、安全なる人生の歸趣を知り、人生の目的を審に了  
 し、初めて無意味に活きるに非ざる本覺を發揮して、進歩の發展を極む可き  
 也。

思惟茲に及んで、墓地一周し了る。山人をして、哲學的知識を有せしめば、  
 必ずや多大の感興を浮べ、一層の趣味を感得せしならむが、腦裏空うして思  
 索の因を絶つ。天を仰ぎて星光を數ふる二三、墓地を出でて歸途に就く。萬  
 世橋畔、さては小川町の通、人の往來を絶たず。下宿の破窓、燈を點ずれば、  
 三十六年一月一日午前の一時を過ぐる頃なりき。乃ち日記を認めて煎餅蒲團  
 に横り、深き夢に入りぬ。



### 咄堂君の『運命觀』を評す

本年四月一日、『死生觀』を著はし。百日を出でずして。六度び版を重ね。現下出版界の寂寞を破つて。叱呼大聲を放ちたる。著述家中の出色者は。夫れ正に君か。

讀書界寂寥たる今の時。君また茲に『運命觀』を著はす。振熾君の如きは。余の欽羨措く能はざる所なり。

曩日『死生觀』の批評を書きたる因縁に由り。君は再び余に向つて。『運命觀』の批評を囑す。一閱多少の感有り。乃ち次の如し。

本書立論の基礎は。古今東西の歴史的研鑽を經とし。最近文明の科學哲學の見地を緯とし。著者が信念の向上主義を以て判釋解案す。所論の要旨は。不健全なる舊思想。迷信的運命觀を打破し。宇宙の意匠。社會の目的を討尋して。其間一貫統一の一系を標榜し。人間處世の意義を説述して。進取努力。以て社會の進歩に貢献す可しとなし。彼の徒らに空想し。夢想し。運命を僥倖せんとするの凡俗を。警醒せんことを試みたる者なりとす。

想ふに本書の眼目は。運命の門を窺ふ可き智識と。門を開くの鍵たる可き意志と。門に入つて専心邁進す可き勇氣とを。鼓吹し。卓厲し。唱導せんとしたるならん。



彼のドライデンの『運命は勇敢なる人を友とし親む』の語を引用し。又『事を決するは癰を切るが如し多少の痛苦はこれを忍ばざる可からず』と謂ひ。又『眞の成功は不成功の自覺にあり然り不成功を自覺す此に於て進取して止まず』と謂ひ。附録『天佑論』の結尾『吾人は天佑の存在を否定せず唯だこれを受くるの恩寵は獨り自ら佑くるの人にあるを云ふのみ』と喝破したる一句を以て。本書始終の主張と。世を導き人を誠めんとする著者が眞摯の本領を知ることを得。

咄堂君は。半俗半僧の若き居士なり。茂りたる黒き長き鬚を保ち。フロツクコートを着けたる二十世紀式の居士なり。日として演壇に立たざるは無く。

東都演説壇上一方の重鎮なり。三世因果を説き。轉迷開悟を述ぶるを以て其の生命とせりと雖も。頑固圓頂者の亞流に狃はず。泰西科學哲學の造詣深大にして。文筆また勁健なり。又近く。『戰爭觀』を著はし。洛陽の紙價を貴からしむと謂ふ。君の如きは。眞に主義と實行と一致するの士なる可し。余は君が口に於て。筆に於て。精力奮闘。精進勇猛なるを見て。自個が怠惰を想ひ。慚愧に堪へざるなり。

世人。運命如何を知らんと欲せば。本書を採つて而して得よ。必ず利する所。尠なからざる可し。

著者咄堂君は。常に余が蒙を啓く。想界畏兄の一人なり。乃ち其の著に接



し。所感の要を綴る斯の如し。但恐る。余が如き者の穉言。本書の聲名を傷つくる無きかを。



花

(上) 言はぬ花

一、散策—普茶雲水—雜僧

東京に来て凡そ小一昔とはなるが、まだ向島を知らぬ、さりとて遊び嫌ひでは無けれど、喰ふか、飲むか、將た唄ふか、とかく斯る俗的目的があつての逍遙なら、時も人も撰びはせぬ、今が今にも遠慮は無い、けれど養生の爲めのぶら—運動、名所探りのぶら—散歩、これが大層不好なので、始終も世間知らずと嘲けられる



今年十月十一日、ふと遊びの念ひが嵩じて來た、降り續けたる雨の霽れ渡り、風收らざれど近日中の好天氣、午後の三時頃、雅仙書伯の通人を誘ひ、築地より電車に乗りて兩國に向ふ、それより二十三噸の蒸氣で吾妻橋へ上り、こゝから徒歩で北に行く

いつしか小梅、枕橋も踏み通りたり、小癩な小蒸氣の煤烟吐き散らすに顔を反向けながら、雨後の濁りの墨堤をステッキ叩きつつ、早や言問ひ團子を右に折れた、これでも東京人の目には名所と誇る向島かと訝らねばならぬ余は、彼方は何、此方は何と、名所舊蹟の因縁を聴かされても、とんと感服は參らぬ、とは云へ、紅塵馬糞の市に包まれて居る野生縦横の余とても、天空

潤達、自ら胸も豁き、氣も澄む心地がせぬでは無い、不風流漢にも、自然の景の權位には化せられる者だと見える

通人の案内で、普茶割烹の雲水へと導かれた、その門に檜笠が掛けられた雲水看板が稍々詩趣ありと氣に入つた、こゝは萩の園の跡とかで、散り残された萩の花も今落ちて居る、破れたる壁や板や粗なる敷石、宛然古寺のやう青鼻は垂らして居らぬが、上り口に兩手を附いて迎ふる雛僧の案内、變んな料理屋

十二疊敷の座敷へ通つた、床の間には佛像が安置してある、食卓の傍には木魚が置かれてある、庭の植木の枯葉の儘なる、池の水の乾て鱗を見ざる、



禪僧が浮世を餘所の香を焼く底の雲水としては、また餘り風致の乏しき景を馳走で、先づ喫茶も濟んだ

ベル、拍手の代りに木魚ポク、ハイと應へて出て來た雛僧、青頭で白衣に黒衣、にこく笑へば人間には違ひ無し、料理といへば僅に四五種、般若湯も二本は傾けたり、これと舌鼓うつ程の風味は一もあらず、たゞ珍らしいと云ふ位、二度と來る奴はあるまいと、庭に下りて見ると、向ふに隠れ座敷が見ゆる、ありやなんだと問ふと、の間だらうと云ふこと、成る程こんな所で、の間とは趣向でげすねと云ふ、こちらはトント解らず、大笑ひ、笑ひて察して覗いて見たが、塵は積れど、アノ枕は見えぬ

給事の小僧は、天海、珍海、澤庵、布袋、西行、盡念、順鐵、空海、の八雛、オイコラ小僧とも呼べぬやうなり、木魚叩いての勘定催促、ポク／＼の音で酔も醒めさうなり、勘定書はこりや何んだ、位牌を摺つて中の文字が引導、金壹圓八拾五錢、オヤ／＼、勘定が引導とは凝つて居るワ、サア／＼早く出て飲み直させう

## 二、江東の秋色—百花園—渡船

秋の日の暮れ易く、蟲の音は聽えぬど、なんと無く淋しい景色、百花園も俗客の去つた後らしい、例の行燈は新に張り代へられて字は下手に眞似られたり、『御茶さこしめせ梅ぼしもさふらふぞ』この文句は活きてるじや無い



花

かね

牀机に腰打ち掛けて見渡せど、モウ花は無くなりて、雁來紅がわづかに園の粧ひを飾るのみ、先づ御茶をさこしめして詩箋を絞らんとすれど、こんな風色には感興の浮ばぬ余に、句の吐ける筈も無し、残念とも思はず、通人を促して渡船に飛び這む

乗合の客七八人、歸りを急ぐ商賈人らし、氣の利きたる顔附は一ツも無し、吾妻橋上の往來いと繁し、あくせくとおまんま喰ふに忙しき様かや、あはれともいとし

船は中流に出づ、真赤な月は中空に笑めり、のぼり船、くだり船、横ぎる

ふね、眺めいと心地よし、ほんに秋の墨川の景色は、飽きがたしと覺えたり  
今戸に着いて雷門に出づ、足は大部疲れて來た、通人は歸途に就く、余は一人ぼっち

(下) 語たる花

三、淺草觀音〓魔窟〓九星術

左右二人の大仁王を門番に、一寸八分の觀音様は意張つたものだ、何んと云つても東京一の人気もの、昔から今に至るまで賽錢雨の降る如くに集まる、その繁昌や羨むに足る、二六時中參詣の客絶えずとか、ぞろ／＼行く、來る中店のこの群集、出世面は一匹も見えず、彼等とも何んのための參詣ぞ、延

花



花

命、富貴、疫拂いの願かけ、たとひ千手観音として、目を廻さる可し、まして一寸八分をや、馬鹿々々しい

この清浄たらんと思はるの地、浅草公園などとハイカラ的名称を付けられたれど、莊嚴の面影は無く、ハイカラ風も吹かず、醜の醜、俗の俗、奥山の見世物は赤毛布を顧客とし、弓場、銘酒、射的、碁會所は、無分明な男子の命の削り場所とかや、白粉まだらのねいさんが咽喉をからして手招きの見つとも無いこと、流石は花のお江戸の便利さよ、難有や

せん餅、すし、しるこ、おてん、牛、豚、天ぷら、飲食店の多き昌んなるど、東京にもまたと無かる可し、されど皆不潔らしい、雷神焼のおせん屋の

ねいさん禱かけて壯し

中の常盤の前に、天下無二天真術祈禱及吉凶鑑定看板見ゆ、術者は神職天明堂岐山と云ふ粗末な老人、余は十錢を投げて縁談の鑑定を乞ふた、彼れは天真術の効能を述ぶるには慣れて居れど、百斷百中と標榜せるも誠に心細い判断方、一向に要領を得ざるがなさけ無し、可笑の商買もあればあるもの

#### 四、吉原の夜景||新内||おでん屋

世の中は暮れて廓は晝になり、不夜城と云へば奇麗なやうだが、空氣が濃くて重くて臭いやうに感ぜられる、余が大門に入ったのはモウ十二時過ぎで有つた、見返り柳もしばしまどろめるにや、かほを打ちもせて靜に枝は垂れて

花



居る  
意見もしたりす、めたりする仲の町も、さやあての昔を追懐するのよすがも見えぬ、元祿、享保の狹斜的理想も、文化、文政の花柳的好尚も、明治の新吉原には面影を遺しては居らなんだ、市虎流の丹前振、町奴式の寛濶姿は見られやせぬ、ア、來なければ好かつたに

秋の夜は長し、折角のこと、マアゆる／＼見物しやう。三階四層の青樓立列びて、往來繁き中には、連の恩で格子から一ふく頂戴せるもあり、トンネル見たやうな、チョン／＼拍子を叩く横町で、しるし額で人を見るつき出しの花魁が、欠伸して目を擦り居れり、あれも人の子、ねむかるに、孝行で

賣られた娘、不孝な息子にうけ出されもせば、本願成就、おかしなものだ。モウ三時になつた、鼻うたの頬被連も居無くなつた、吐月峯に迄入ッ當りのふられ客も、明らめて寝たるらし、余は方角を失ふて迷子となつた、揚屋町のなにかし樓の軒の下に菰樽がある、しんどさのあまり、腰をかけて一吹のむ、ふと見れば、同じ軒下に股もあらはの破れ襦袢一枚着たる數名の子供が、土の上に轉がりて鬻聲盛んなり、余は懼然とした、オイ／＼と目を覺さしての物語り、子供の乞食、仕方無し奴

かすかに近づきて來る新内の流し、好い響のするものだ、余が樽に息ひ居る、その樓の二階から新内の注文、阿賭物を包んだ白紙のひねつたるを地に



投げる、新内屋さんは四十格好の女と、三十位ゐの男、男が包を開けて中を見る、女に私語く、御注文はと伺ふ、曉鳥と奴鳴る、余は煙草をのみつゝ面

白聴く、例の小供は知らぬ風で寝て居る

一段語り済んだ、禮を述べて新内屋さんは流して行くのである、余は呼び止めた、男は云ふた、どうでした面白う御座んしたらう、余は流しの譜を教へて呉れと頼んだ、二十錢お出しと云ふ、二十錢を渡す、生憎筆も紙も無い、オールドの箱を破壊す、マッチをもして黒くして書かんとするけれど、黒ひ所はすぐに無くなる、箱の紙が洋紙であるから旨く字がかけぬ、ツルツルテソソと頻に遣つて呉れるけれど、中々撥数が多くて、チヨイと記すことが

出来ぬ、加之に軒の瓦斯の火影が暗い、ジレッタイこと

女は云ふた、お前さんは見る所書生さんのやうですが感心ですことね、こんな遅くまで見廻つて、種を得て小説かなんか書いてお母さんを養なうつて云ふんでせう、本統にお道樂ぢやありやし無いんだから、チャこうなさいこゝでは駄目ですから、大門を出ているのは横町を直向に行つた所で、福師匠てや直ぐにわかりますから、そんならそうしませう、あばよ

お腹が空た、大門を出た、夜通しの歩きづめ、おでん屋の腰掛にやれく、コップ酒一つ、おでんにはんぺん、おでん屋の懷舊談、夜毎の景氣話し、角海老の時計鏘々四時を打つ、話し最中福師匠が歸り来る、彼れもおでん三本



花

たへる、挨拶する、男の方は返らぬ、定めしどこかへ登樓つたのであらう  
 五時半空漸く白く、土堤八丁を朝風に吹かれて、待乳山に上る、今戸のほ  
 どり江東の野、朝のもやに包まれて、漂渺として居るのであつた  
 と、ある<sup>ていぶつら</sup>面<sup>やせ</sup>の瘦こけた書生の話してある



## 人生の意義

(一)

自然により近かき昔の時代には、世の中は極めて單純で有つて、降る雨吹く  
 風、天然のまに／＼、生を自然に委せて居た、恰も、山野に住む動物と、餘  
 り大した違いは無かつたので有る、雷から電氣を發明したり、水から蒸氣を  
 發見すると言ふやうな、今日文明の原動力の存すること杯は、夢にも思ひ寄  
 ら無かつた、其の頃は、世間も嘸かし閑靜で、平和で有つたであらう、人類  
 も定めし悠長で、お人好して有つたかも知れぬ、或る學者から、折々、世は



太古に返へれ、人は自然に歸せよ、と、聽かされるが、其處にも多少の道理は有るかの思ひもせられる

さりながら、社會の目的は何んで有るか、人類の歸趣は何んで有るか、考へて見れば、夫れは、進歩的文明で有るで有らう、向上的理想であるであらう、この進歩と向上とを基礎として、諸有新學説が稱へられ、千百の事業が起されるやうになつて來たので有らう

新學説が縷述せられ、新事業が勃興する中にも、何が一番肝要で有るかと問へば、『人間と』言ふ奴である、何が一番六ヶ敷いかと言へば、先づ『人間』程、六ヶ敷い問題は無い、この位困難な大問題は又と有るまい

世界が出来て今日まで、統計表に現はし得ざる程人間は産まれた、けれど、未だ一人として其の肝要な眞趣を捕へた者は無い、思へば今日まで『人間』も無意味の動物たるに過ぎなかつた、まだ今後幾百千萬年の將來に到らねば、本統に價値有る時代に逢接し得ぬで有らう

今日までに死し、又生きて居る人で、肝要な眞趣を了得せるものは一人も有るまい、皆んな無意味に死んで行くので有る、ほんに思へば恐ろしく、又、悲しい、この多くの生と死とを見せて、サンシングは、吾人をして其の肝要なる眞趣を悟了せしめんとするのでは無からうか、吾人は永らくこの問題に惑ふて居る



宇宙がどうだの、世界が何んだのと言つた所が、夫れはモウ既に枝葉に亘つた議論で、根本問題では無い、勿論、北極の端から、南極の極に到る全世界の變遷と、將來の趨勢とを知悉することも、中々大變て有らう、宇宙萬象の極致を窮むることも、勿々容易ならぬ難事て有らう、併し、世界は所謂『人間』が建設して居るので有る、宇宙は『人間』が認識して居るので有る、其の『世界』と言ふ名も、其の『宇宙』と稱する詞も、『人』が作り、『人』が言ふので有る、『人』が無くして、何處に『世界』が有らうか、『人』が知らぬ何所に『宇宙』と言ふ者が有るであらうか

人は地球の一部に蠢動し、地球は天體の一遊星たることを觀察すれば、『人』

たる者は、誠にみすぼらしい、小さな者のやうでは有るけれども、其の一遊星を知り、其の地球を知り得んとする者は、『人』その者のみで有る、遊星は夫れ自らを知らぬ、宇宙は夫れ自らを知らうともせぬ、『人』にして初めて知られるので有る

この『人』なる五尺の一物が、宇宙間に於ける諸問題の根本て有る、中心點て有る、この問題が解決されたならば、世の中に一つとして解せぬと云ふ者は無い、一つとして六ヶ敷いと思ふ種は無い、無限長、無量大の宇宙觀と言ふ滅法巨大問題も、唯一の『人』なる者の價值さへ決定すれば好いので有るこの『人間』が何物よりも絶大至難の大問題である、



(二)

真理の實在を認識し、萬象の去來を識度する者は『人』なり、吾人試みに眼を開きて中秋明月を見れば、月は笑つて中天に光れり、知らず、この『光』は月に在るや、將た人の『眼』に在るや、諸君は疑ひ無く其『眼』に在るを首肯するならん、世に若し『人』の如き、感覺ある生物の無からんには、真理も亦存せず、萬象も有るべからず、豈、社會在り、宇宙の在らう筈が無い。茲に於て、吾人は明かに是れを知る、宇宙萬象の本源も、時間空間の關聯も、一に係りて吾人『人』に在らざる可からざることを、『人』は、『真理』の根本で有る、『人』は萬象の源流で有る、『人』無くんば、萬物無し、『人』在るにあ

らずんば、天地の間、何等のオーソリチーを表示し得ざる者なりと

口唇緘せられ、鼻穴閉ぢらるゝこと、僅かに數分間にして死する如き薄弱なる『人間』も、茲に到りては絶大無限の靈力を有する者となさねばならぬ、而も斯かる偉大なる靈物は、如何の動機に由り、如何の作用に依りて現出し終に今日の『人』とは成つたので有らうか

吾人々類が最初の起源は、何人と雖も是れを知ることが出来ぬ、人類が何の目的を以て産れ、何の眞趣に由りて生存せるや、斯かる問題は、千古の大疑問で有る

人類は意味有り、價值有る目的を以て出現したる者では無い、水中に子



を生じ、雨繁くして、竹の子を簇生すると何の異なる所が無い、子子は此に生存欲を起し、蚊とならんことの目的を起し、其の目的を達せんが爲に適當の方法に依らんことのみを希望することは、明白の道理で有る、『人類』も彼の梅雨が土壤を興奮せしめて、簇々竹の子を發生せしめし如く、最初に過つて男女交接の作用に感觸是れ戯れ、竹の子の生ずる如く、子子の出でし如く、産み出されたので有る、茲に於て生活生存の欲を起し、子子の蚊に變ることを欲するが如く、吾人は無邪氣の赤子より、『人間』となることに、蠢動したる者で有る

人生の意義は、唯だ一の『活』のみで有る、この活きるに附いて、種々の問題は起て來る、けれども夫れは枝葉で有る、宗教と言ひ、道德と言ひ、政治法律すべてのことは、吾人が『活』きるに附いての、便宜なる方法に過ぎぬ、吾人は枝葉の法便の爲めを以て、吾人の本領を打ち忘れることは出來ぬ、吾人が人生の意義を、没却することは出來無い

人は『人』が一番高尚な動物で有ると思ひ、また言ふて居るけれども、どこが高尚なので有らう、試みに、高い所から臨んで、この下界を見下したならば、『人』と『犬』と、更に變つた所が無いと、言ふかも知れぬ、成程梅と櫻と、其の花が違ふ如く『人』と、『犬』と、其の容は同じうは無いかれども、其の愛生的意義に於ては、些の高下が見えぬ、これは餘り極端な言ひやうかは知ら



ぬ、だけれども吾人が今日までの観察と思惟とに依つて、この言の棄て難いことを思ふて、吾人は慨嘆に堪へぬ

吾人『人間』は、或る目的を以て産れた者では無い、又或る主義に依つて作られた者でも無い、人は、人生の面目を言ひ、人生の歸趣を談る、されど、それは、矛盾たらざるを得ぬ、『人間』は一の目的も、何の主義をも持た無かつた、たゞ無意味に産まれたので有る、たゞ、無主義に作られたのである、彼の犬の如く、鼠と同様に

(三)

進歩と言ひ、向上主義と言ふとも、夫れは、活るに附いての、便利な手段

を言ふに過ぎぬ、吾人が、進歩、向上の福音を聴くや久しいけれども、實際に於ては、まだ曾て何等の享受する所も無かつた、斯かる主張は、骨折り損とても言ふ可きで有る

吾人は、『人間』の主義なる者は、本能満足主義で有らうと思ふ、博愛主義と言ひ、また社會主義と言ふも、歸する所は、本能主義に攝まるのである、吾人の抱持せる眞實の主義はと問はゞ、唯一この本能主義なのである

古への大宗教家は、博愛主義を唱へ、他愛主義を説き、十九世紀の學者間には、社會主義が稱へられたが、吾人は未だ曾て、本能主義の福音には接し無かつた、博愛主義も、他愛主義も、社會主義も、其の目的とする處は、結



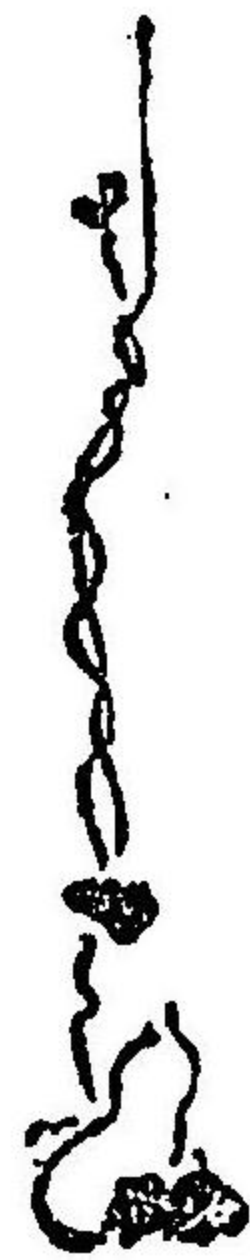
局、個々人をして、能ふ丈けの満足に附與せしむると言ふ事なので有る、如何なる主義にても、吾人が天真を曲げて、個人の幸福と進歩とに害の有る筈の者では無からう、自己が苦痛を忍んで、他人を愛すると言ふことは、吾人には出来無いので有る、無論、そんな行爲をなせし者も無ては無い、併し、夫れは何か他の理由が存して居たので有る、吾人が普通の場合では、到底望み得られぬことで有る、萬一にも、そんな事をなせし人の有らば、其の人は、その方が、反つて、自身を満足せしむるので有つたので有らう

吾人が觀ずる、人生の意義なる者は、吾人が天賦の本能性の自由の發展を謂ふのである、人類の歸趣は、進歩的文明、向上的理想に在ると聽く、成る

程、さうかも知れぬ、倫理學者や、宗教家に、人生の意義を叩けば、必ず、さうだと言ふに違ひは無からう、が、夫れはたゞ古來先輩の口傳を真似るに過ぎぬ、勿論、吾人も、進歩したる文明の世に住みたい、無論、向上的理想の心を持ちたい、だけれども、たゞ、たい丈けで、吾人は、到底夫れが叶はぬ、『人間』と言ふ奴は、どうしてもそんな世には生まれ無い、そんな心は持て無い、富國強兵などと言ふ文字が無くなり、黄金貨幣の使用が廢止と成り、親達が子供に恥づる思ひと行ひとの無く成り、夫婦の秘密の無く成り、でも爲る様な時節が來たならば、或は、吾人の今謂ふことが間違つて居るかも知らん、さりながら、こんなことが、そも、いつ出来やうぞ、『人間』を作る、



先づ其の『人間』を改めねばならぬ、何物がこの慾深く、汚れ多き動物を改良し得るて有らうか



### 銀月と日本史及び百字文

近時、吾が文壇に於て、衆人羨望の花役者たり、持て囁さるゝ流行ツ子は、銀月伊藤君なりとす

疎山瀬川兄、其の主宰せる『書籍新報』紙上に、銀月君及び日本史の評文を掲げんと欲し、余を以て其の任に當らんことを強ゆ、疎山兄は余が知己たり、其の希望に應ずる、毫も不可なかる可しと信ず、乃ち、この文有る所以なり

余が初めて銀月君の名を知りたるは、昨春朝報紙上に君が文を看たる時なり



りとす、されば、其の以前に於ける君に就ては、更に知る所あらざるなり、君の文が、一度び余に少からざる氣呵を與へたる當時、友に勧められて、また君が二三の著書をも看、終に、余をして、君が名を忘れざらしむるに至れり

君は東北の産なり、然れども君が風姿に接すれば、宛然江戸ッ兒の如し、長は高からず低からず、骨格整然、美目秀眉、肉付き豊かにして血色に光澤あり、所謂男らしき人と謂ふ可きなり

君は、異常の神経家なり、他人の一顰一笑に注目を怠り得ざる如く、自個の一舉手一投足にも注意を欠き能はざるに似たり、君がまた非常の凝り性に

して、更に又趣味に憧るゝ情感の烈しきに至つては、時に或は常人なりやを疑はしめ、性行の奇癖を見るに於て、時に或は變物なる可しと思はしむ、そは君の奇文を讀み、奇行を聽く者の、直ちに首肯する所、此に特に、高帽高襟を嫌ひ、紋附を遠ざけて濼い柄を選び、江戸の通の面影を慕はんとし、達ならざる辯の補ひを筆鋒に發露することの面倒臭くなるや、忽然として御嶽山裡に吟嘯する底の奇行奇癖を叙せざる可し

君を知れる或る人は、彼れは奇を衒ひ、策を弄すと云ふ、さあれ、余は彼れを詩人的性行を有し、文壇天才の一人と認むるに躊躇せざる者なり、其の觀察の卓群奇抜なると、其の筆鋒の峻峭銳利なることは、誠に君が天才を證



して十分なればなり

君が文を見て、魔せられざる者、天下夫れ幾人か有る、景を叙しては酔<sup>よ</sup>はし、情を描きては泣<sup>な</sup>かし、事を記して奇、人を評して妙、是れ皆常凡の観察と其觀察を異にして、一種奇才の發揮する所以、君を天才の一人に加ふ、誰かこれを怪まんや

神経質、凝り性に趣味の情を加へて、文士三性とす、是れ余が常に主唱する所の者なり、即ちこの三性を備ふるに非ざれば、文士として成功し得ざるを思へばなり、君が神経質にして凝り性なることは、その襯袴の袖口羽織の裏に現はれ、其の一舉手一投足に知らる、君が趣味の度を知らんに、また甚

だ深大なる者ありて存す、君が鏡花の作を譽め、緑雨の死を哭する所に由りて、君が詞文に於ける趣味の趨向を知ることを得

君の文章は、君が性の多感神経質を現はさて、撃てば彈<sup>た</sup>り、觸<sup>ふ</sup>るれば爆<sup>は</sup>る底の男らしき活躍の氣を以て遣る、而かも、輕浮ならず、放漫ならず、深き趣味は沸々として涌き、澁く凝りたる所、喰<sup>く</sup>い附<sup>つ</sup>き度<sup>た</sup>いやうな心地せしむ、君、今、文壇を馳驅して敵を見ず、世人君が文の醜<sup>みに</sup>に舌鼓す

銀月君、君は夫れたゞ所謂文士たらんことを欣び得ざる人なり、世人は君を只操觚者とのみ見、文章家と稱し、三面記者とのみ思へり、君が目的の眞意を知れる余は、茲に君が爲に、未だ宣明されざる他の一面の本領を紹介せ



んことを欲す、君が本領の居る所、豈、操觚者、三面記者たるのみならんや  
君が朝報紙上、江の島の地理學的研究を説き、鮫鱈の生物學的研究を述べ  
斯道専門の博士をして驚嘆顔色無からしむる所、夫れ君が本領の幾分を漏ら  
したる結果には非らざる無きか

所謂文士なる者は、地理學、生物學の如き科學的研究を以て無趣味殺風景な  
る者と譏り、幼稚の見を以て、吹けば飛ぶ的基礎無き文を作ることとを甘んず  
是れ一般文士の常態なり、然るに、銀月君に至つては、天來の趣味を科學的  
研究に得、地理學、生物學等に於て、斬新の發明せんことを以て、其の終生の  
本願と爲すと知りては、何人か其の異例異種、風交りの奇に驚かざるを得ん

や、君が文の、詩的玄想を經とし、科學的觀察を緯とせるは、源此に發する  
無きか、これ君が、多くの文士と其の特色を異にし、光彩外に見能はざる所  
たりとす、君が文壇の未知數と謂はれ、造詣不可測と稱せらる、豈、理無し  
とせんや

『日本史』は、この人の手に依りて成る、好評嘖々文壇に喧傳せらる、誠に  
其の所たり、天才の手に作られたる渾成品は、夫れ此の如き者なる可きなり  
『日本史』一篇の要旨は、君が特得の人情觀を以て、二千有餘年間の日本歴  
史に活躍したる人物の表裏を窺視して、縦横無盡の解剖分拆を試むるに、詩  
的科學的玄想觀察を恣にし、奇想新異の造語は冗を制し、慢を縮め、引き締







別に雑誌『百字文』を發刊するの盛觀を見るに至る、『百字文』がこの發展す可き自然の好運命を有する者なりとするも、また、銀月君が、如何に現代青年間に私淑され、崇拜され、欽慕せられつゝ在るかを知る可きなり

銀月君は、曾て朝報紙上に、其の友幸徳秋水氏と同年齢なることを記せり秋水氏は既に數年前に文壇一方の重鎮と稱せられき、君が名を成すの急からざる、余は寧ろ疑訝したりしか、今日の君が殷莊を見て、深大の蒞蓄造詣に忙しかりしを知ることを得たり、鶴九臯に啼き、天馬空を騁るの慨、文壇只君に由つて見るのみ

余は猶ほ多く君を知ると雖も、余が文の進達を待つて記さんことを欲す、

人物の高下、作物の品騰、容易に成し得可からずとす、知らず、余が如上の觀察と感想とは、君を描し、書を評して多く過らざりしか、若し夫れ、君の意に叶はず、君が違ふと爲す者有らば、乞ふ辭に諭し、嚴に噴喝すること勿らんを





## 上野の半日

△今日も編輯樓上の戦争談はなかくにさかんである、ひそかに二三の仲間を誘ふて上野公園に散歩をせずやと計りしに、同意者ありてサア行く可しと弓町社を出て電車へと乗り込んだ、上野へ来れば、いつしか浮世の俗塵を拂ふて、身は樂園に逍遙する心地とする、木々の梢も秋の色の深ければ

△第九回白馬會展覽會を見舞ふた、一代の好尚が藝術の方面へ向ふることは事實である、その觀覽者が中流一般の者の多いので解る、本回の出品數は昨年よりは少い、時局の影響に依るゆゑか、時局の影響と云ふ者の、さて一枚

の戦争畫の出品の無きは訝しいでは無いか、幼稚な人物、未熟な風景でさる一生懸命に遣つて猶ほ且つ漫さるゝ現状、とても目前の活畫題を捕へ得ぬのでもあらうと友の一人は云ふのである

△十年前だ、日清役の當時京都の第四回博覽會で、余は初めて黒田清輝の例の三千圓の裸體畫を見た、この頃から漸やく色彩背景の審美的藝術論が、彼方此方に聽られる様に成つたと記憶して居る、十年一昔だ、けれど文學美術の如きは匆々一朝一夕の修養を以て効果を表す能はず、況して古來毫も我邦には見ることの出来無かつた油繪の、ツイ近年の模寫の稽古だにも未だ時間が短い、將來發展の過度期と思へば、我慢をせねばならぬであらう



△白馬會今回出品中の評判高きは、和田英作の『有るか無きかの刺』、即ち八百屋お七と小性吉三郎との表情畫なのだ、是れ一つを見たさに這入つて見たその畫題が見ぬ先から氣呵を呼び起した、さりとて余は、鈴木主水や曉鳥が恰好の畫題だと、思ふて居るのでは無い

△すべて文藝の作品は、主題の選擇に三分の一の腦力を用ゐねばならぬ、その邦の歴史的事蹟に於て、一般人の深く心頭の感觸に力強き者を探るが最も賢き方法と云はねばならぬ、そは觀者の情感の刺激が他の物よりは比較的に強大なるが故である、余は藝術渾成品の美の極致は、理論をも説明をも離れて、たゞ高潔、雄大又は崇美なる情感の刺觸にあるのでは無からうかと思ふ

△お七吉三の事實は正確に知ることには出來ぬ、正確な事實だと云はれるのよりも、矢張小説化されたる路卷の傳説が却つて詩的で面白いのだ、芝居に、淨瑠璃に、はた機巧で人は皆知つて居やう、惚れた小性の吉三に會ひたさの情切にして我が家に居る辛苦さや忍ぶ可からず、一念蓄じて終に家に火を放つ、無邪氣天真の戀もあたら時の刑には觸れ、可愛や火焙の大罪人とはなつた△一個可憐のお七、ア、お七、『お七』の名の、マア何んたる氣持ちの好い名だらう、濱町藝者の『お梅』有り、紅葉館女中の『お絹』の如きもあれど、これ等は既に明治式に成つて居る、俗化して居る、嫌味が混つて居る、箱屋を殺し秋濤に釣られる鹽梅を見ても、天真の高い香りの無いことが見える



△戀人に會ひ度い、どうしても會はずにや居られぬ、放火の大罪、情緒一點の戀は、焰炎慘澹の大悲劇を演ずるに至つた、『お七』の如きの『戀』が、眞成の戀だ、末世の今、誰かお七の情緒に憧憬し得やうぞ

△お七、若し火を放つ無くば意氣や無し、火を放つの動機が即ち戀人に會へるのだとの希望なり、無邪氣な内にも凜たる江戸ッ兒的氣憤が滿ち溢れて居る、お七を描寫せんには、現下の文壇、銀月式、さては鏡花張りの詞藻を以てせねば能はぬ

△和田英作は『有るか無きかの刺』の題下、この無邪氣天真爛漫の情緒の描寫を試みたのであらう、白馬會場中の大作、自ら人目を牽く、第一その色彩の

鮮麗濃艶に於て、次に元祿式頭髮と衣装とに於て、謂はんや表情姿態の天真無垢、あどけ無さに於てをや

△聽けばこは藝者をモデルにしたとか、成る程見たことの有りげな今様の顔附、人物畫の急所は其の顔面に存し、目眸一點の所に在るのだ、お七の方は首肯せらるゝが、吉三の顔があまりに女顔になり過ぎて居ると小さ過ぎて居るのが欠點だ、それがために調和が釣り合はぬ、雙方の目元の表情的表現が、この作の中心とならねばならぬ

△要するに、その筆力、その配合、形式に於ては稍成功に近かく、その表情の間の脱けたるは精神の缺くるに由るのであらう、譬へば龍を畫て點睛をゆ



るかせにしたるものか、けれど余は、今回白馬會中出色の大作として賞嘆するに躊躇せぬのである

△白馬會を出て廣々した公園の青々たる景色を見れば、眞に活きたる油繪の人造の風景よりも更に／＼晴々する、友の勸むるままに今度は動物園に行つた、野生余が如きは、此所に面白味が多い

△鳥は女性的、平和的だ、獸は男性的、戰鬪的だ、鳩や鷗の長閑さよ、象の質樸、駱駝の悠長、猿の狡猾、熊の百性らしき、虎の武士らしき、獅子の帝王らしき、皆それ／＼の美を持たぬは無い中にも、特に羨望に堪へぬは、鴛鴦の番つがひ並びて立つ様だ、羽の構へ、色の飾り、全身皆美、華族の姫様も及ばぬ、

牡にのみ斯くも装ふは、牝をして戀慕はしめんがためとかや、夫婦仲の善い體裁が明々見ゆる

△人間は、女に飾りて男が惚れるやうに出來て居る、鴛鴦とは反對だ





## 思想の變遷

(一)

東洋蜻蜓洲の過去は、二千五百有餘年の長き時期を、將して如何なる事物の發展に經過したので有らうか、之を世界文明國の青史に較ぶれば、日本の歴史の、獨り光輝燦然たりとは謂ひ得ぬて有らうかなれど、民族的内亂の他時には外敵を懲し、異域に乗り出せし、この一種武力的氣質が、日本魂と名づけられて、蜻蜓洲の國民的氣風となり、偉大なる精神的基礎を養成し、萬邦絶無の一異彩ある忠君愛國の思想を作成したるの事實は、神代武勇の遺習

として、何人も之を外人に誇ることを喜び、二千五百有餘年の間、一貫したる日本國民の一大思想が、この日本魂と謂ふ、武力的忠君愛國の思想で有つたことは、誰人も是れを認めるので有る、即ち、日本民族の思想の發達が智略では無くて、感情的に養成せられ、武力的思想が、彼れの固有の特色として發揮せられるに到つたので有る

萬國興亡の歴史を繙き、其の文明に發達するまでの、國民の發展を觀察するに、何れの國と雖も、武力的ならざるは無く、英勇豪傑の指揮の下、擾亂闖闖を以て、各國歴史の初幕を演ぜる事、概ね其の揆を一にせざる者は無い去り乍ら、社會及び人類が、何時までも武力腕力杯、野蠻未開の陋習を存



ぜしむる筈の者では無い、文明開化の一大潮流は、洋の東西に流れ／＼と、絶えず／＼社會と人類との進歩を促して居る、是れが乃ち、吾人の、千古萬代を一貫したる、向上主義の連鎖に繋がられて居る所以の理の存するからで社會進歩の變遷、人類思潮の發展は、この絶大無限の宇宙力の氣呵に歸因せねばならぬ、たゞ其の潮流の流域、流動の遲速に依りて、各國文化發育の狀態を異にすれども、千年萬年、遠き將來に臻れば、一の向上主義の理想境に一致發達することは、更に疑ふ可からざる、宇宙進化の天則で有らう

質朴素卒の天真の武勇を以て、角逐これ樂みし日本民族も、秀たる富嶽の威嚴と、渺たる琵琶湖の寛濶とに、旭日に匂ふ艶麗の山櫻が、吹く嵐に惜氣も

無ふ散る、凜々しい氣象とに圍繞せられ、化育せられて、天真の勇壯に情け有るやさしい床しき性情を作られた、加ふるに、絶東の端に微に位置を占むるとは言へ、四週皆海に面したれば、進歩啓發の潮海は、二千五百年の往昔より、この君子國の發展を促しつゝ、流動の歩を急ぎ、調を速めた

## (三)

されば、論語、千字文の渡來を首めとして、隣邦朝鮮との貿易、支那との往來が、いつしか我國に、孔孟の教、老莊の道、李白杜甫の詩、三國水滸の文を輸入し、朝野舉つて、子曰を誦し、月落烏啼を唱ひ、日本固有のゆかしくやさしき素朴の特性は、嚴然たる儒教と、超風なる子風と、高潔の句、濃



艶の詩、豪放の章、磊落の文などに感興せられ、薰化されて、段一段の光彩を加味した事實は、疑ふことが出来ぬ

多く喰ふて、能く化熟するのが日本人の一種の嘆稱す可き特質なので有る佛像と經論との貢が、遙に遠き印度の高尙なる思想を吸收す可き動機となり浮世の無常を説き、來世の淨國を教へた結果が、邦人をして、層一層なさは深き人種に化育した、勿論、印度佛教の趣旨は、凡衆をして塵世退嬰ならしむる底の者では無い、轉迷開悟、吾人の企て及ばざる程、廣且つ大なる哲理を教へて居るが、多くの説く者、多くの聽く者、俱に感情に流れ、弓矢を携べて戰陣に馬首を向ふの武士が、手に念珠を持ち、口に稱名を誦する風であ

つた、けれども、この佛教の説教典籍と、社會的勢力とが、精神的に、物質的に日本民族を開發したる効力の多大なる事は、讀者既に能く知る所である

四面皆海の日本は、國民が如何に無智頑固なりとも、粗野質朴なりとも、蠻國攘夷たりとも、内尊外卑たりとも、其の國民性及び人工的反抗を以て、長く桃源に眠りを貪り能はぬ、天然自然の國勢が、彼の進歩の潮流と、内外呼號して、折々質朴なる日本民族を覺醒し、喫驚せしめ、寒膽ならしめた、彼の天草の亂は、日本天然の國勢が、文明進歩の潮流と、相ひ提携し、相ひ混和し、相ひ一致し、相ひ融通せんとする、所謂宇宙力に、世間見ずの人民が、反抗を試みたのである、この絶大の宇宙力と、社會的趨勢とは、武勇



を以て誇稱せる日本民族も、終には敗北した、これが、自然力の尊く、恐る可き力ある所以なので、京都の御所の後ろに、宏壯なる同志社の破璃窓が、東山を出づる朝日に反射眩燦せる其の教場に、何右衛門、何兵衛、何助の子孫の、何太郎、何吉が智識を研ぎ、思想を練り、精神を作られる様になり、東京駿河臺上、巍然としてニコライ堂の峙ち、鐘樓中空を摩して九關の殿上を睥睨し、九鐘轟々、神田ッ兒が鼓膜を震撼せしめ、幾萬の日本人民の精神的安慰の樂園となれるを想ふては、誰か彼の思想潮流の作用の、偉大力に驚かぬ者が有らうか

## (三)

五十餘年前、ペルリが伊豆の海の波濤を蹴つて、黒煙を東海の天に漲らしたのが、東洋の東端に微に眠りたる、一小蜻蜓洲が、古今未曾有の一大破天荒の動機であつた

神代遺習の武勇的日本魂と、旭日に匂ふ山櫻的優美の情性とが、支那思想、印度思想、及び歐米先進の文物及び基督教の流布とが、混和雜入して、今日吾人の思想を作り成したのである、天然の我國勢と、文明思潮の流動とが、二千五百有餘年の間に、一波一瀾、發展を試みた結果が、明治現下の、日本の思想とはなつた、其の一波上る時、一瀾下る折々の、一動一搖が、當時の民人をして、如何に戦慄せしめ、騷擾せしめたて有らうか、けれども、この戦



慄と、この騷擾とは、今の幸福となり、今の進歩となつて居るので、事物變遷の過度時代には、免れられぬ現象と云はねばならぬ、固着沈滯は、退歩の本、波瀾縦横は、進歩の源で有る

日本人今日の思想は、日本固有の思想では無い、雜種混入の思想となつた其の雜種混入の今日の思想なる者は、之を分析するに、神代遺風の武勇的所謂日本魂なる者と、支那、印度に於ける儒佛思想、及び十九世紀の歐米より渡來せし、基督教と科學との感化啓發で有る、斯かる數種の思潮が、小さき壺中にコンデンスせられた、其の仕上りが、吾人の今の思想とは成つた、けれども、新陳代謝の理法は、古き物をして益々其の價値を輕減せしめる、其の

時代には必要なりしことも、時代の推移は要求す可き者にも進化したる者を欲するので有る、吾人が思想上より、日本魂なる者の口々に消滅せるを見て、慨嘆の聲を發する輩も有るが、この現象は祝す可き進歩の現象なので有る、吾人は、何時までも、支那的感化の下に養成せられることを泣かねばならぬ、印度の佛教が、日進月歩の吾人を、指導するに、適せぬやうになるのは自然の道理で有る、基督の思想の距離は、吾人が進歩す可き距離の遠長には及ば無かつたので有る

萬川海に入つて一味の鹹水に化せられる如く、勢力の強大なる者は、薄弱么微なる者を變化し同化せしめるので有る、吾邦に於ける數多の思想も、永



久に個々獨立の位置を占領し能はぬ、必ず勢力の強大なる者に引き附けられ、同化せられ變化せられねばならぬ、然らば、日本魂、儒道、佛教、基督教、及び近世十九世紀の哲學科學等の諸有思想中に於て、最も勢力有る者が、他の勢力薄弱なる者を牽引し、同化せねばならぬ、謂ひ換ゆれば、最も進歩したる新思想には、他の進歩の度低き思想は、溶合され、同化せられねばならぬ、即ち、萬川海に入つて、勢力強大なる鹹水に化せられて仕舞ふ様な者で有る、さすれば、現今數種の思潮中で、如何なる思想が最も強大なる勢力と成つて居るかと思惟せば、吾人は十九世紀に於ける、歐米最新思潮の發展て有ると明言する

## (四)

歐西十九世紀思想の變遷は、誠に多端であつた、吾人は先づ

第一に國家的思想を問はねばならぬ、これは權力問題で有る、中等以下の人民が、帝王、政府、貴族の壓制を受けて困められ、參政權を有せられざるのみか、一個人たる權利さへも認められ無かつたが、智識の進歩は、この非文明を寛容せず、漸く帝王、政府、貴族の壓制を攻撃し、人民は參政權を有せざる可からずと主張した、この權利問題は終に佛國大革命となつて、歐洲全般を騒然たらしめたが、漸次に其の勢力を増大し、人民の權利は確固たる基礎を作り得た、これが國家的思想で有る



第二は社會的思想である、こは貧富問題なのである、富者の法外の傲奢に抵抗して、貧民が多少の自由を得ねばならぬ、貧富の懸隔大なれば、人民に參政權ありと雖も、事實に於ては無きに同じである、是れ人道に違背するなきか、此に於て、博愛、慈善、貧民救助策を設け、經濟學、社會學の研究となつて來た、即ち、今の社會主義が勢力を膨脹するに到つた、これが社會的思想で有る

第三は個人的思想で有る、政治の自由を得たる結果は、個人の自由競争となつて來た、新地の發見、器械の創製、學藝の進歩、貿易の擴張、生産力の増加を來たせり、之れ全く個人の自由、自由の競争等より胚胎せし結果に

外ならぬ、之れが個人的思想である

第四は科學的思想である、物質上の研究の發達と、學術應用の進歩とが、一般思想に一變轉を起さしめた、實驗哲學の勃興は、最早、不可知、神秘等の幼稚な時代を切り抜いて、毫も迷信を容る可き餘地が無く成つた、そこで、ルイテル以後大に變化したる耶蘇教の如きも、容赦無く打撃を蒙る様に成り、世界の諸種の宗教は自然科學の研究と、實驗哲學の勢力とで、其の地盤を動搖せられるかの鹽梅である、然れども科學と哲學とは宇宙及び心靈の全部を説明するとは成らぬ、たゞ科學的思想の進歩が、其の他の全てに、健全なる思想を吸収す可き、動機と成り手段と成つたのである、この効力はまた



偉大なる者であらう、これ即ち、科學的思想の一進歩と云はねばならぬ

泰西十九世紀の思想が、四十年前より駁々として吾人が思想を開發し、啓蒙するのみならず、日本一種固有の舊思想を變化せしめ進化せしめるのである、斯かる最近の一大思潮に、吾人が先祖傳來せし思想の根底は、動搖せられざるを得無く成つた

國家的思想は、切り棄て御免の舊夢を打破して、一足飛びに、立憲政治と變り、日比谷の原に貴衆兩院の議事堂を建て、六百の代議士を擧て人民の自由と國家の進歩を商量せしむる様になり、社會的思想の勃興は、社會主義と成つて現はれ、著述、講演に由りて喧傳せらるゝ結果は、正に一代を風靡せ

んづる趨勢を示し、彼等が主張する處の主義の幾分は、遠からずして事實に現はれるに相違なからん、個人的思想の發達は、個人の自由競争と成り、學術、商工、殖産等、激烈なる進歩の動機となり、即ちモルガン、カーネギのその如く、終に、三井三菱と成つた、されど、個人的思想は、貧富の懸隔を大ならしめ、少數有力の人によりて、多數の貧民が奴隸的壓抑を受くる次第なれば、共愛主義、人道問題の鼓吹となり、これも亦社會主義の一問題と成つた、次に科學的思想の奔流は、滔々として吾人が舊思想を洗濯し、溶合して一大破天荒の變動を促した、科學思想が吾人を啓發せし急激變調は、吾人同胞が有する思想の區々に分るゝ所以なので有る、けれども、この偉大



なる靈力を有する宇宙自然の潮流は、必ず將來に於て、一の理想的思想に溶合し、同化することて有らう

併し、斯かる變遷は、たゞ、物質界の變化に過ぎぬ、現象界の變遷に過ぎぬ、吾人は物質的、現實的のみで甘んじて生きて居ることは出来ぬ、今の世が、奢侈輕薄に流れ、志尙の墜落に陥るのも、餘りに物質的の一面にのみ背進したる病的文明の結果である、けれども、この病的は恐るゝには足らぬ、他日理想の園に逍遙せんと欲するに、近路を走つたからなので、是れを全癒せしむるとは、さまで苦勞でも有るまい

殺風景、無愛相の現下の社會を視て、思想の發達したる者、觀念の超凡なる者が、宇宙觀に疑ひ、人生觀に惑ひ、煩悶の叫聲を放つに到れるも、強ち無理では有るまい





## 戦時所感

學術の進歩し、人智の發達するに従つて、吾等の眼界は高く登り大きく廣がります、一事一物の研鑽攻究にも、從來は單に世界的、人間界の範圍内で論議されて居りましたが、今日ではモウ駄目、那樣そんな小さな理屈では容れられぬ、地球的、イヤ宇宙的で無ければならぬ、宇宙其の物の意味する所を研究した結局の眞理を標的として、百事百物の本性を視察し、一事一物の關聯する所を闡明せねばならぬのです、乃ち今日の吾等は、一つの問題に會ひ一つの出來事に遇へば、宇宙的眼識を以て研究の態度を取らねばならぬ、宇宙主

義を基礎として、解決の規矩を置かねばならぬ、この『宇宙主義』で『戦争』を觀たる、私の感想の一斑を述べ度い

『戦争』と云へば、誰でも恐こわいとだと案じます、『戦争』と聽いて、目出度いことだと思ふ人はありませぬ、これは一應最もな様ですけれど、夫れは間違ひです、私は『戦争』は恐いとでも無く、いやなこととも思ひませぬ、成る程、貴重な時と金と、大切な人命とを賭し、加之おまけに多くの損害と心配とが湧き出るのでありますから、一面から觀ると、悲愁慘憺、誠に忍びられぬ如くに思はれるけれど、これは一面の觀察に過ぎぬのです、宇宙的眼識が無いのです、利害と人情のみの關係から、『戦争』に對しては誤解があります、利害問題



人情以外、モット／＼大切な道理を知らねば成りません

大切な道理とは何んですか、宇宙活動の條理、人類生存の目的であります、サア、この『活きる』と云ふのが本源ではありませんか、活きるが本です、『精力して活きよ』が眞理なのです、宇宙の生物は、皆『活きん』とに精力し努力して居ます、其の精力は、『戦争』ではありませんか、進歩の妨を爲す物は皆敵です、敵は撃たれねばならぬ、それには努力が必要だ、其の努力を『戦争』とは云へませぬか、これが恐いんですか、いやな事ですか

宇宙の創造以來、吾等の生れてより死に到るまで、地球の滅亡に歸するまで、嗚呼、想へば、一場の『戦争』なのです、極端の様ですけれど、地球は

『戦争主義』で創られ、吾等は『戦争主義』で生きて居る、ほんに『戦争』の世である、ほんに吾人は『戦争の兒』では無からうか

活きとし活ける者、何一つとして生存の競争をせぬ者は無い、仙人ならばいざ知らず、人間である以上は、否、生有る者ならば、この生存の競争を避けずには居られぬ、生存競争を遠慮して居たなら、死んで仕舞はねばならぬとなる

私は『戦争』と『競争』とは同じ意味合ひのとだらうと考へる、『戦争』は偶發的一時的で有るけれど、『競争』は永久的平生的で有ると云ふ違ひのみだ、『競争』は平和の『戦争』です、何時何所で『戦争』を起すかも知れぬ、『戦争』は



『競争』の一部分と見るとが出来る

宇宙の現象を熟視爲ると、どうも『戦争主義』と云ふ一大原則に由つて創作<sup>つ</sup>られ活動して居る様だ、考へて御覽なさい、宇宙の創造を、人間の生産を、不思議な程面白い戦争的行動を表現し、戦争の意味が存在して居るでは有りませんか、よし好んで『戦争』を爲る者は無いとしても、『競争』が人類生存の第一義だとすれば、是非が無い、人類本然の天性が、立派な『戦争主義』だ

この『戦争主義』を以て、自己の神靈と身體とを安如健全に發達させるのが吾等の活ける大目的であります、精力を盡してこの目的に到達せられ無い者

なら、寒巖の枯木よりも遙に劣等な邪魔物です、諸君よ、右の頬を打つ者あらば左の頬をも向けよと教へた人は、二千餘年前の野蠻時代の教訓としては必要で有りましたらうが、廿世紀の今の世にも應用の出来ると思へば大變な心得違ひです、今些し嚴しい例を引くと、かりに最愛の妻を人の誑すを傍觀して居て顧みざる者が有りませうか、人間なら辛棒は出来ませう、一命を抛け出して妻の危険を救助し援護するでせう、これは自然の至情ですもの

一視同仁、四海兄弟、實に斯う有り度い、誠に此の心を持ち度い、けれど、人間は先づ其の近きより親しむが順序で有り人情で有ります、如何に寛大なる人、四海兄弟主義者でも、己が妻を以て、他人の情慾に供せしめ能はぬ



自分の生れて住んで居る國の權利を損し、利益と名譽とを害する者に向つては、見逃しは出来ぬ、自己の發達を妨げる者には抵抗せずには居られぬ、人情ですもの、自然ですもの、勝敗の如何は問ふ所に非らず、どうして我慢が出来ませう、どうして戦はずに居られやう、戦わ無いなら、人では無い、人ぢや無い

諸君、私供の生れぬ前から、吾が日本は、いやな露國、いやな露人と云つて居ました、吾等は久しく癢に觸つて居たのです、『天意』を伺ふと、一撃に彼れを破れとの啓示が、警鐘の如くに聽こゑもするし、明りくと見ゑもするでは有りませんか、長い間の握拳にぎりこぶしを、力十滿いっほい彼れの頭上に打ち下すことが、

愉快でくたまりませぬ

容貌の醜い奴や、根情の曲つた奴や、慾の深過ぎる奴、鳥に例へたら驚おどろの様な人間が、如何にも『天』の氣に入らぬ、『天』は折角人間を作つたけれど、大部作り損そこないが出来た、『天』は夫れを見る度びに氣持ちが善く無い、どうか機が有れば、改造仕度いくと待つて居る、其の筈だ、天界は、日月星辰の序正しく千古不易、誠に結構な組織に成つて居る、人倫を顧みず、不義を務とせる下界の彼れを見ては、本統に氣が氣で有るまい、今にも強慾非道の驚おどろの様な奴原を、櫻の花の様に美麗うつくしく、梅の花の様に凛々れんれんい、菊の花の様に香しき、正義忠愛の君子國の人の様に改造仕度いと永年の希望で有る



併し斯る破天荒の大改革は、一朝一夕のことでは成し遂げられぬ、急激に試みられぬ、漸次遷善の方法を立てたらしい、『天』は此頃の東洋の風雲を眺めて、我が意茲に現はれたと、嘸喜んで居ることだらう

結構な世界、立派な人間計りと成る様にと『天』は唯其の希望の成功される様にと苦心し焦慮して居る、而かも茲に棲む生類も人間も、醉生夢死、未だ曾て毫も『天意』の在る所を知らなんだ、嗚呼、吾等は久しい間『天』に背き、『天』を苦しめ、『天』を泣かした、實に思へば勿體無い

『戦争は終に世界を統一し、正義ある者に従はん』とは、吾等の空想たるのみならず、天意の存する所であつた、下界の或る人が平和と稱する所の者

は、『天』の甚だ快しとせぬので有ります、何んとなれば、彼等の所謂『平和』は、一種の策略に過ぎぬ、偽善だとか貪慾だとか云ふ罪惡を蓋ふ爲めの表飾で有つた、神聖の『平和』では無い、地球が出来て未だ日は淺い、人類が産れたのは、ツイ先日このあいだで有りませんか、今から早や平和會議だなんて云ふて、この汚れた人々と世界を共にして安んじて居られませぬ、『天』に向つて恥かしい、勇奮努力、戦闘競争、他日神聖なる『平和』の基礎を作るのは、未だこれからです

この最後の平和を來たすには、『天』にも色々目論見も有るでせうが、どこかの國民へこの破天荒の重任を頼み度いと所望して居るでせうか、剛勇壯烈、



誠忠博愛、云はずとも知れた吾が日本國民に信頼し度いには相違無い、私はどうか、この『天意』を酌み取つて、久しい間吾等に恵を垂れる『天』に向つて、大ひに酬い度いと存じます



思ふまゝ

○遊樂に耽るとも。藝術の如きに楽しむとも。すべて趣味にあてがるゝと謂ふには。餘程の忍耐と熱心とを要するので有る。世人は斯々るには眞面目に成らぬ。趣味の憧憬を輕んじて居る。なぜ眞摯になれぬだらう。お金を儲けるとには本氣に成るが。趣味や思索はどうでも可いとは。あまりに味氣無いでは有るまいか

○趣味と謂へば中々に廣い。人々に由つて皆一樣では無いけれど。趣味より得らる嬉しさの心地に變りは無い。余は知識を研くのも。趣味の輪廓を伸ば



す爲めだと思ふ。此に生きて居るのも。趣味にあてがれんが爲めでは無きかとさる。思はれるのだものを

○去年の春は尾上菊五郎が去り。同じ秋に市川團十郎が逝き。本年の夏に市川左團次も死んだ。明治梨園の三大優の音容は遠く消へてしまつた。今に成つては什麼しても。其の聲色を聴くとも一目見るとも叶はぬ

○彼の新俳優に至つては。『壯士芝居』と謂ふ名だにまだ尊敬の重みを加へ得ず。團菊左の門下にも。親分師匠の片真似なりとも出来る者として今にこれと見込みの有るでは無し。舊劇末路を速めて新劇勃興の遅く。しばしお芝居もお仕舞かと案じらるゝ

○けれど。徒らに追懷に悲泣せんよりも。おしさうぢや。單り靜に故人の音容を思ひ浮べやう。天才の一舉手一投手は何時いつに成つても光は減らぬ。偉人の一顰一笑は。末年に成る程はげ彩が増す

○ほんに思へば十年前。田舎で寢轉んで雑誌を讀んで居た頃に。櫻痴居士の『春日傘』を讀んで遙けき東の空を打ち眺めて羨んだが。終には紅塵の客と成つたので。七八年前に慥か市村座と思ふて居る。まだ都大路の方角も知らぬ時分。友に誘はれて菊五郎の『鹽原多助』を見た。彼の忠誠な馬と百姓多助との別れの場。人間同士にも稀に見られぬ恩愛の表情。今にも其の時の彼れが活躍を忘れ得ぬ



○夫れからとても繁げく芝居を見るとは出来なんだが。歌舞伎座で團菊顔揃ひの二三度は見るとを得た。『芳哉義士之譽』はなんだか澁過ぎたせいかさ程には感じもし無かつたけれど。『二人ばかま』にはほとく緘黙を保ち能はなんだ。實に喜劇として我が邦にも斯くまで自然に出来て居るのがあるのかと嬉敷う思ふた。『博多小女郎波枕』で。團洲の毛剃九右衛門。菊五の小松屋宗七をも見た。今に記憶を去らぬ。この上に未練を謂ふては無理に成る。

○去年の春で有つた。東京座で左團次の『籠釣瓶花街醉醒』を見た。『中萬字屋の場』で佐野次郎左衛門と成つた左團次が。花魁に振られて。その情れなさをかこつ聲色は。まだ明らかに耳底に響いて居る。籠釣瓶の名刀を以て花

魁を殺した後。花街の騒亂。上を下への大混雜。中萬字屋の屋根での立ち廻りの物凄さ。この優特得の光景。まだ明りくく目の奥に映つて居る。今年の二月で有つた明治座で『後藤又兵衛』をも見。又同じく『敵國降伏』をも見た。蒙古より持ち來りたる重寶な巻物杯を伸べて妻の心底を探る所が。この優の見納と成つたのだ。残り惜いとは謂ふものの。この上に不足は謂へぬ。

○目下國民の一般が興奮的勇勃の敵愾心で満ちて居るから。梨園の方面も注意を拂はれぬけれど。遠からず凱歌を上げて太平を誦せねばならぬ。さあさうなれば人心歸趣の自然として藝術の趣味に依らねばならぬのだ。小説家も美術家も將た俳優も。急ぎ仕度に掛からにやならぬ。



○時代思潮の發展は。近時藝術の尊嚴を加へ來り。從て藝術家を尊重するやう謂はれて喜ばしう存ずる。斯う有らねばならぬ筈なのだ。夫れにしても一代の天才と稱せらるゝ人は多くは無い。うかくして居たら。天才の面影をも見逃がさねばならぬ。余は幸に現下藝界の達人には大抵接する事が出來た。○中學時代であつた余は大坂に遊んで一夜『文樂座』に連れられた。今の攝津大椽當時の越路太夫が當夜の語物は『お俊傳兵衛猿廻の段』で。淨瑠璃には初耳の余には。人形の身振の巧みなよりも。太夫が朗々の美音に魔せられざるを得無かつた。太夫の唇を滑り出た抑揚の音波は。透明の玉と成つて。宙に動いて響いて居るかといふかられた。太夫の如き美妙の音を聽きては。竹絲

管絃の音も。その價值を減ずるのだ

○太夫の住宅も陋しからず。家庭も清潔らしく見受けられた。行品も亦非難が無いとか。流石彼れ程の美音を恣に爲る丈け有つて。妻女は太夫の飲食物の調理を大切な務めとして居るさうだ

○一時は東都の義太夫界を薙ぎ巡りて斯界の女王の如かりし綾之助は。容姿の美。音聲の美。やんやと囃される資格は備つて居たけれど。自ら一身の得策を計りて其の業を抛ち。死するまで藝の奥に到るの熱心を缺いた。机に倚りて死ぬる覺悟の文人は頼母敷い。舞臺で死ぬる覺悟の藝人で無ければ本物では無さ



○人の上手に尺八を奏するを聴きては。忽ちに自らも吹いて見度く成り。人の好く舞踏するを見ては。直ちに自らも真似て見度く成るのは人の通有性では有らうか。見る物聴く物を余は試み度く思ふた時代が有る。彼れも是れも遣つては見る者の。只ほんの門口を覗く位で本統の面白味を嘗められぬ、本統の妙味を知るまでは忍耐が繼かぬ。熱心が保もてぬ

○將碁をさすと。五目ならべ。圍碁。歌かるた。トランプ。一八。花合せ。さては玉突杯の小なる遊戯でも。一通りの筋途を知るのみならばさ程六ヶ敷くもあるまいかなれど。ちよいと趣きの浮ぶまでには辛棒の外に。金錢時間の浪費を憚んでは駄目だ。イヤ浪費などと謂ふのが悪いかも知れぬ

○こんな小さい遊びでも。矢張り遊びの才が要る。才の外に天賦の性質にも關係する。五目や將碁ではさうでも無いが。花では失敗者は尠く無い。其の譯けだそれ丈け面白いから。だが面白いと謂ふに過ぎぬので。知らぬ傍き目から見たら。馬鹿々々しさに堪へられぬ

○玉突は善き遊びだと思はれる。日本の昔から遣つて居る遊びは概ね衛生には害と成つて居らぬは無い。けれども是等勝負事の外の遊びでは随分風流なが多い。余はまだ俳諧の趣味は知らぬが和歌や漢詩を作る稽古はした。これ等は多く古人の糟粕を嘗めるに過ぎぬ。勿論新體詩新派和歌と謂ふのが昌んに遣つては居るが。詩歌の道樂は狭小な者だ



○道樂と謂へば盃裁。釣り。その他住ひ。着るとより食道樂に至るまで澤山にある。思へば人の爲るとは皆その人々の道樂と謂ひ得るかも知れぬ。けれど道樂と職業とは區別が有る。職業には骨が折れる。道樂には肩は凝らぬ。職業には耽り難い。道樂にはオツクに思へぬ。職業でも金は儲かる。道樂ではそれが費へる。

○道樂で一番余が好きなのは音樂音曲だ。余は知らぬが西洋音樂も好からう。尺八。三味線。琴杯は一寸遣つて見たが何れも六ヶ敷い。日本の樂器は快活勇壯には適せぬ。余は快活勇壯が嫌ひだ。故に西洋音樂の調子の高いのを好まぬ。浮きたる聲よりは沈んだのが好い。太いのより細いのが好い。

○音曲の妙味は言葉の妙味と一致せねばならぬ。尺八の音の幽遠は稱す可しだがその言葉が素人には解らぬ。琴の音は琴歌と共に變化が鈍い。三味の面白さの深いのは歌ふ唄の弘く多きに由るのだ。義太夫の盛んなのは其の文句が他に較べて能く解り。より多く感動を與へるからだ。眞面目臭ひ長唄よりも常盤津の艶つやの有るのが余は好きだ。新内になれば一層面白い。長い文句はいらぬ。短い句でも二上り新内は人の腸を斷たしむる。

○頭の鬱々したる時。胸の閉がつた折。音樂で癒なほる。鼻唄でも好い。これを試みれば頭は軽く成る。胸は爽然と成る。咽喉から出る音波の作用で。その不快をさるも癒し得る。不思議なと謂はねばならぬ。



○余は余が一生に大事業大成功を期待する無く希望せるは無い。小さい道樂に耽けつて。生を送り度いと欲ふのだ



### 書籍新報記者に酬ゆ

八月三十日午後三時、午睡醒むる時、文祿堂主人より、『帝都書籍新報』第十一號を贈り來る、これを一見せしに、『近刊人間論』なる題目の下、拙著『人間論』の批評を記載せられたるなり、察するに、こは同新報記者の物されたる所ならん、余は記者足下が、『人間論』の如き者に對して、此の如く説明の勞を恪み給はざりし懇情を多謝し、斯の如く指教を垂れ給ひし厚意を感謝せざる可からず

先づ、記者足下は、『人間論』に、「初めて此に、赤裸々の本體を露出せざる



を得ず。』と、謂へるにも拘らず、其の本體を露出することに於て、成功し得ざりしと爲し、又、死は人間の最大趣味の如き、三文の價も無き閑文字なりと稱する者の如し、然れども、余は、これを成し得たりと信じ、これを價有る文字なりと想ふ、『人間』の本體を解剖し、『死』の趣味を説述するに、『人間論』は、其の要義を提供したる可しと信じ、余は此の遺憾を覺えざる者なり

記者足下は、如何なる解案に接して、これを満足せらる可きや、余は、記者足下の如き學識該博の先輩をして、諒得首肯せしめんと欲して、この論を草せしには非ず、そは敢て余の成し能ふ所に非ず、余は、余が思想と主張とが幼稚なると、淺薄なるとに依りて、記者足下の嗤笑を招かば、余はこれを甘

受して、また憂苦せざる可し

記者足下の外、某は、余が論述を首肯し満足せりと謂ひ來る、されば、足下には満足を與へずとするも、某には首肯を價せしならん、足下に首肯を價するの榮を得しとせば、乃ち某の不満足を稱ふる所たらんか

古人曰く、吾れ文を爲れば必ず人に忤ふ、と、また想へ、往古より今日に至るまで、大聖先覺の一經一論と雖も、千古に亘りて、萬衆の歸依を求め得し者ありや、『聖書』は多くの強敵に包圍せられぬ、『大乘經』は非佛説を呼號せられつ、拙著『人間論』の如き、謂ふに足らざるなり、この理を知れる余は記者足下に多くを答ふるの必要を見ず



次に又、記者足下は、『人間論』より利益を得んと欲し、新説を案出すべき材料を尋ねんとして、兩ながら失望せられたる者の如し、余は、記者足下が失望せられたりと聽きて、更に失望し能はざる者なり、そは、著者が豫期せし所たればなり、『趣味』の爲めにのみ活ける余は、これも亦一の娛樂なりと感じて著作し、既に余に多少の愉快を附與したればなり

記者足下は、『人間論』が科學的に、哲學的に、諸有學術の系統に照らして、古今先覺の學説を祖述せし者なる可しと想像せられたるならん、然れども、余は想ふ、そは全く無用の徒勞たるを、趣味乏しき業たる勿らんかと、蓋し記者足下は、人間論の名に、喝嚇おどかされ、所謂買ひ被りたる者か。

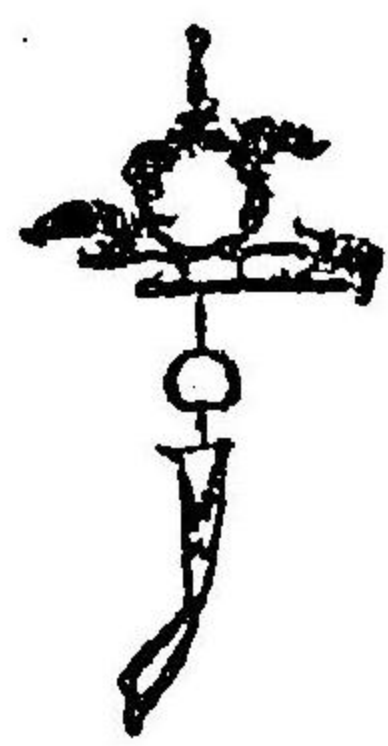
記者足下、足下が期待せる、利益と材料とは、圖書館に入り、足下が研究の努力を以て足下が能ふ所までは、これを收得し得ん、されど、足下、そは必ずしも眞理の捕捉たらざる可く、著者の所謂「無益の徒勞たりし」とに覺醒せん」やも、亦知る可からざる可し

記者足下、『人間』は、不淨の個所より個々に産み出されたりき、『人間』は、到底圓滿に和合し一致し能はず、曹操の智を理想と爲る者も有る可く、孫權の才に私淑せる者も有る可く、劉備が徳を以て修養せんと欲する者も有らん、夫れ、千人がこれを法とし、萬人がこれを理と爲る所、天下一物も有ると無し、況んや、余が如き者が、一時の娛樂の爲にせし著作に於てをや、若し夫れ、



強て『人間論』中、那邊の意義の存するやと問はゞ、余は、余が『真理』と認了せる所の者を記述せりと答へんのみ

午睡の後、頭腦明敏ならず、如上の文、其の體を得しや否やを知らず、翻讀煩に堪へず、たゞ、記者足下が勞に酬ゆるなり



## 余が文壇觀

### 其一

題して『文壇觀』と云ふは。文壇を觀察して得たる余が感想を記述するのて有る。凡そ一國精華の神髓は。文學的産物に於て最も明白に表現せらるる者で有る。其の時代の思潮も好尚も。直ちに文字に由りて反響さるゝ。大きく云はゞ國家の動靜も。社會の趨勢も。忽ち慧敏なる操觚者の耳目に接觸してタイムの變遷。史的材料の描寫を致されつゝ有るのだ。されば。文學なる者が其の國家及び社會に影響し關係する至大の發展は。其の國民一般の好んで



注目留意せねばならぬ所。然るに邦人が文學藝術に對する觀念は殆んど絶無。其の冷淡さ。其の知らぬ振り。只呆れるの外は無い。舉世滔々形而下實利の一方に趨り。人心日々無趣味殺風景に墜つる所以。識者多少の憂慮無さを得ざる可し。

文壇の一波一瀾は。時代の思潮と時人の好尚とに。反響し反映し。其の間淺からぬ關聯を認め得ん。この文果して正鵠なる可きや否か。自ら之れを知らず。誤謬は先輩の指導に由りて訂正せん。幾分の價值有らば。また以て徒勞の事たらざりしに満足せんのみ。

## 其二

吾人の聽ける近き過去に於ては。先づ福澤諭吉の窮理的教訓的述作より。末廣。末松の實用的政治小説は出て。外國人の著作。漸く吾が文壇に現はれ或は傳奇の雛案。政治及び科學小説の譯本と成り。自然の趨勢として感情小説を促し初めた。けれどまだ當時一般の讀者は。馬琴。種彦等の勸懲的小説に泥みて未だ徳川時代の遺物的文學の外に。讀書慾の嗜好を求めやうとはし無かつた。この時に當りて。坪内逍遙。勸懲打破の『小説神髓』を著はし。寛政の範域を脱却せしめ。『當世書生氣質』を作りて。寫實の神髓を表示し。從來の教訓的小説を斥けて。文學本來の眞價值を標榜し。國民の精神的慰藉に充てんと試み。此に初めて。明治小説の新天地を開發した。



セキスピアーと本土固有の文學とを調和して。逍遙氏卒先新作を出すや。多種多様の装ひを以て。文學の趣味は此に勃興した。即ち。鷗外氏の獨逸文學に於けるが如き。露西亞文學の四迷氏。嵯峨の屋氏の如き。思軒氏のユーゴーに於ける如き。探偵奇譚的翻譯物の涙香氏の如き。夫れ盛んなりき。且つ櫻痴居士の脚本より。篁村翁の八文字屋物。紅葉山人の西鶴。露伴氏は佛敎思想を鼓吹し。浪六の撥鬢小説より。澁柿。南翠。美妙。弦齋。眉山。水蔭。麗水。乙羽。宙外。風葉。魯庵等の時代には。一葉女史の煩悶小説と成り。柳浪の狹斜心中物。鏡花の神仙小説。小波の兒童向ふ伽話。天外の寫實主義。蘆花等の宗教又は家庭的作物杯。紛々雜然として各自獨特の想を構へ。

筆を揮ひ。百花爛漫の姿を呈して文壇を賑はし。明治小説に貢獻する所多大なりき。

## 其三

余が文壇の消息を知解し得るやうに成つたのは。今より十年程前で有る。維新後二十數年の間は。余之れを詳知せず。彼の二十七年。日清開戦の運命に逢接し。一たび凱歌の聲を上げてより。邦家百般の事業。其の史上に一大割線を表現するに到つた。すなはち。生産投資の風。頓に經濟社界を靡き。生活浪費の習。旋て山間僻地に及ぶ。此の時に當りて。誰か。文運勃興の隆起を防遏する者ぞ。然り。實に。戦後の文運は。恰も。狂瀾怒濤の天空を突



貫するか、の猛威を逞ふし。本邦未曾有の文學熱を高騰して。而して今日に及べるので有る。

回顧すれば。維新の大業漸く其の緒を整へ。社會百般の施設先づ其の方針定まり。世界の趨向に鑑みて新陳代謝の勞に疲れ。世はしばし沈睡を催さんとする時。國民何を歌ひ何の思索有らんや。この時に當りて日清干戈の活動起り。稍世界舞臺の一角に臨むとを得たのであるから。國民熱情の心血は一時に相ひ喚發したのだ。明治文壇に序次を立つるには。維新以向日清戰役までの間を第一期となし。日清役と日露開戦までの間を第二期となし。夫れより後ちを第三期となす可きである。第三期の發展は今豫め斷じ難しと雖も。

吾人は。明治文壇の中心たり。明治文壇の活躍はこの第二期の時に見るとを得たては有るまいかと思ふ。たとひ第三期に一大飛躍あり得るとするも。其の因の發する所。其の動機の源する所は。この第二期の一波一瀾より出づるを首肯せねばならぬ。

## 其 四

二十八年頃より。彼の定期刊行物は續々として發行せられ。各種の方面に文學的趣味を鼓吹すると同時に。新進作家を奮起せしむるの氣運に向ひ。小説歡迎の聲は日々に高まり。演劇と文學との調和。劇の改良を稱へしめ。藝術の論。思潮の侃諤。竟に甚だ昌んと成つた。



斯道に於ては、『文藝俱樂部』が先づ現はれ。次に『新小説』を出し、『新著月刊』また發兌され。猶ほ一冊完結の讀物頻々として出でた。此に一々掲載するとは出来ぬけれど。この時分より發行せらるゝ雜誌にも。其の内容其の外観共に昔日の者とは趣きを異にしたるとは皆人の知る所だ。

たとへば。夫れまでで一世の耳目に觸れて讀書界に歡迎され多少の貢献有りしは。『少年園』『文庫』『國民之友』『早稻田文學』等で有つた。其の他博文館より二三雜誌も出たけれど。純たる文學的雜誌は先づ此の如き者で有つたやうに思ふ。

とにかくに二十七八年以後。吾人の所謂明治第二期の文壇は。華々敷き舞

臺面の變化を現はし得たるは相違は無し。

雜誌『青年文』の出た前後扱は。最も活氣の有つた頃で。新聞では『萬朝報』『日本』『讀賣』等で。常に評論の奇抜なる記事を見るので有つた。其の方面の文士には。嶺雲あり。綠雨あり。抱一庵あり。皆青年間には一風異彩の陸離たるを以て稱せられて居たのである。

吾人が所謂第二期間の小説變遷の状態を記述せば。個人的事變の小範圍内に述作されたる者が。團隊的若しくは社會的範域の事變を記述されるやう成りしを以て。一段の進歩を成せしと認め得るので有る。こは社會一般の知識が發達して來て。自然に要求することの出来るやうに成つた結果でも有ら



うが。讀者の眼識の進歩せることを。作家自らが悟ることを得た結果にも歸せねばならぬ。

第二期間に於ける其の初めと終り頃との有名なる作物に就いて之れを比較すれば能く諒解することが出来る。彼の柳浪の『今戸心中』は第二期當初に於ける最も喧騒を極めたる作物であつた。夫れと相前後して。水蔭の『泥水清水』一葉女史の『たけくらべ』杯。如何に讀者心琴の線に觸れたりしか。狹斜的作物の如何に評論家を惑はせしか。さりとして作其の物の上下には取材の如何に由りて判断を成し得なかつたては無いか。『今戸心中』の如き。『たけくらべ』の如き。共に明治小説界に於いて。またと得易らざる傑作なりと評さ

れたては無いか。

夫れがいつのまにやら數年の後に到つて。幽芳の『巳が罪』を見。春雨の『無花果』を見。蘆花の『不如歸』を見ると、成つた。此に於て讀書界。特に小説界には非常なる變遷の行程を示して居ることが理解されるのである。人は情慾一偏に傾く者に非ず。同情も。愛慾も亦人の趨る所。されば社會の進歩に伴ふて暗黒的方面を脱し。光明小説の出づるやうなりしは。理の當然と云はねばならぬ。

### 其五

他の方面を觀察するに。また同じ時代より。新體詩の創作。さては和歌。



俳句の新調も稍々理想の域に到達し。普天の下。率土の濱に至るまで 中央文壇旺盛の餘波に催されて吟詠創作の勃興を來たし。近來。新聞に雜誌に殆んどその一を掲げざる無く。夫れく専門の著書數ふ可からざるが如き有様で有る。

先づ新體詩及び新派和歌で云ふならば。鐵幹あり。晚翠あり。泣菫あり。有明あり。俳句に於ては。概ねの文士皆是れを味はざる無しと雖も。特に旗幟を立てゝ一派の重鎮たるには。故紅葉山人あり。故子規子あり。故永機翁あり。鳴雪あり。碧梧桐。虛子。等一世に卓絶して異彩を放つ者。我が國俗に適順したる平民文學が。國運と共に其の趣味の憧憬者を増加すると云ふこと

は。一の注目す可き現象と云はねばならぬ。

次に言文一致の著書。汗牛充棟も當ならぬに見ても。一般文章の變態を察知する事が出来る。又。嶄新なる繪畫及び意匠は。明治美術の進運を示し。裸體畫と風俗問題との論争も。亦随分喧轟を極め。今に爲政者を悩まして居る程で有る。

この美術界とても。十年前日清役の當時。京都の第四回博覽會で。一世評番の高かりし黒田清輝の三千圓の裸體畫を。余は入念に見た。この頃から美術界にも漸やく色彩背景の審美的研鑽講述が。彼方此方に聽かれる様に成つたと記憶して居る。十年一昔だ。けれど文學美術の如きは匆匆一朝一夕の修



養を以て効果を表はし得ぬ。況して古來毫も我邦には見るとの出來無かつた油繪の。ツイ近年の模寫の稽古丈も未だ時間が短いので有るから。將來發展の過度期と思はねばならぬ。この三千圓裸體畫を以て我美術界破天荒の初産物とせば。本年上野の第九回白馬會展覽會に出品された和田英作の『有るか無さかの刺』を以て。十年修養の成績を發表したる者とせねばならぬ。斯見地より觀たる其の比較の結果は何處で有るか。無論好成績で有つた。表情畫としてかばかりの作を得たるは。吾人の大に満足せねばならぬ所である。其の筆力。其の色彩。遠近の配合。形式丈けにても。全幅の調和に於て吾人は我が邦美術の前途に向つて。悲觀する事の無益たるを知つたので有る。

## 其 六

古事記を出し。萬葉集を出し。源氏物語を出し。入犬傳を出し。新井白石を産み。近松門左を産み。西鶴を産み。山陽を産みたる我が日本は。思索。感情。太古より文學的要素を作られて居る事は明白の事實で有る。されば近く十數年間に世運の進歩に伴ふて。海外文壇の消息は。晨に傳へられ。夕に聞へ。あらゆる主義の論議を戦はすやうなり來り。論評研鑽の舞臺は。作品創作の昌んなるよりも。猶ほ且つ一層の熾昌を見るのである。先づ思想界に喧傳せられたる其の間の變遷を尋ぬるに。キツプリングに稱へられし英國に在る帝國主義。露國トルストイの博愛主義と。ゴルキーの浮浪説。獨國より



到來のニーツエの超人本能説。那威のイブセンより出でし社會主義。白耳義のメーテルリングの神秘論等。此の如く提供せられたので有る。就中。彼の高山氏の『美的生活論』出でしより。想壇は忽ちに赫氣を加へ。坪内氏の『馬骨人言』の長文は現はれ。一代人心歸趣の混鈍區々たる。誠に平然たり能はなんだ。

殊に近く數年前。戀愛文學の隆盛は一世を風靡して未曾有の高熱に騰り。我が國の文學は戀と涙の外。また他あらざる者の如く思惟せしめ。青春の子女が机邊に藏する小説は。自ら父兄に隱匿せざる可からざる者のみなりしなり。すみれ。ばら。ゆり。蝶。螢。月の外。詩人の詩題は無さかと怪しまれり。

た。夫れより後は。頻々として海外文壇の月旦を喧傳すると。名家大家の佳篇を紹介するに至り。情慾興奮的の文字も日日に其の創造力を減退し。専ら實用部面の家庭的問題。婦人問題。社會問題等の唱導となり。讀書社會稍靜閑を來たせし折柄。吾人は如何なる氣呵インスピレーションを與へられしか。

吾人が惱天の印象に明かなる最近三十六年の春頃の騷壇に於ける現象は。文壇のみならず。宗教界哲學界教育界及び思索家一般の留意を牽起したる。忽焉として出でたる人生問題なりとすべし。彼の藤村操の投瀑が。思想界活躍の幕を開き。沈々黙々。醉生夢死。久しく昏睡を貪りし我が邦人も。此に初めて哲學。宗教。倫理等形面上の講演説述に耳を傾け。人生の觀念。死生の



意義の學說示導を聞くに臻れり。この間千古不磨の一大快著として『天人論』は著はされたので有つた。

哲學の思索。神靈の攻究。文壇に於ける其の喧轟も。歳逝くと俱に其の聲收まり。本年となりては。唯だ人々口々。日露戦争の風雲を云々するのみで有つて。今し文壇沈々。其の向ふ所の如何を知らざるが如き有様で有る。

## 其七

我が陸海軍人の忠勇の。露國の夫れに優勝なる事は。天下皆是れを稱譽し讚嘆せざる無く。國民自らも亦大ひに其の意氣を昌かんらしむとは雖も。嗚呼。また一人の日本の文學者は露國の文學者に優れりと云ふ者あらざるは

何んの故ぞ。吾人豈慨嘆の聲を發する事を禁じ得ざるでは無いか。

日清戦役より日露開戦までの十年間の我が文壇の大勢は略ぼ上述の如し。今後平和恢復後の吾が文壇は。果して如何の發展を來たす事で有らう。先づ一般人の思ふ所は。必ず露西亞語の勃興隆昌を招き。随つて露西亞文學の輸入頻繁とならんとは。餘り違はざるの豫想たるならん。今日まで我國に傳へられたる海外文學は。最初は英國に起り。こは既に十二分の研鑽を遂げられ今は英國詩文の趣味は普く吾が讀書界に行き渡つて居る。次に醫學哲學等の本場として、専門に獨乙に修學する者も尠なからざるより。獨乙文學の如きは稍昌んにして英國の次に位し。佛。伊に到るも美術彫刻等の攻究の結果自



ら其の普及を見ざるに非らず。只露西亞のみは僅にトルストイ、ゴルキイ、アントンチエホフ有數二三の一面の面影を知る事の外は。未だ輸入翻譯の餘地甚だ廣大なる可きを疑はず。蓋し文學は美を賞すると第一の目的とす。文學に於ては敵も味方も有る可からず。彼れの長ずる所は。我れも是れを探り。彼れの短なる所は。我れこれを補はん。而して遂に精神的に相互情趣の交換を力め。共に人類共有の幸福を享受せんとを欲せねばならぬ。

## 家島の記

はしがき

近比は、世の人の多く、旅行を好みて、その旅行の文の、頓に、ときめきそめぬ。昔は、おほかた、雅客、輜徒、治者など、一部の人士等は、東西の河海を涉りもし、又は、南北の山岳を越へもせしかど、山水勝景の風色に放吟せしものは、慨して、捨家棄慾の人々のみとも謂つべかりき。さるに、世の開け行くまに、よろづの便利となり、且は、外國人の、旅行を貴ぶ所以を聽きて、自らその利益と趣味との、さこそあらめと首肯せられ、斯く